

「学校と塾の関係を問う」機構公開研究会（2005年7月2日）

苧谷 今日には広い部屋を用意したんですが、これがいっぱいになることはございませんので、どうぞ後ろ側の、通路を挟んで後ろにいらっしゃる方もなるべく前のほうにお掛けください。パワーポイントを使ったりする都合で、多分後ろのほうだと見えにくいと思いますので。これだけ空いておりますのでぜひとも前のほうにお詰めいただいて、お座りいただければと思います。

それでは定刻になりましたので、これから東京大学大学院教育学研究科、教育研究創発機構の公開研究会「学校と塾の関係を問う」と題しまして、この公開研究会を開かせていただきたいと思います。私は、本日司会を務めさせていただきます、当機構の機構長を務めております東京大学の苧谷と申します。よろしくお願い致します。

今日はこれから大体4時ちょっとぐらい回るかもしれませんが、それぐらいの時間をかけまして、今申し上げました「学校と塾の関係を問う」というテーマで、公開の研究会を開きたいと思います。既に皆様方にはご案内のこととは思いますが、昨年もこういった「塾と学校」というテーマで当機構では公開研究会を開催致しました。今回はその第2回目ということで、また前回とは違う視点からいくつかの問題についてひもとくと。学校の関係を問うということで、皆さんと一緒に議論を深めていきたいと思っております。

ここでは趣旨の説明は簡単にとどめますけれども、ご承知の通り、日本の教育というのにはある意味で学校と塾という二重の構造によって成立しているということがあります。

学力の問題を論じるにしても、あるいは最近のいろいろな教育改革の問題を論じるにしても、この塾という存在を抜きに日本の教育を論じることは大変難しいというふうに考えております。これまでなかなか教育研究の世界では、この塾の問題というのはどうとらえるかということについて、必ずしも十分な研究が行われてきたとは言えないんですけれども、やはりこれだけ大きなウエートをしめております塾という問題について、当機構では、やはりこれを一つのテーマにしてやっていこうということで、この機構のもとに学校臨床総合教育研究センターというのがあるんですが、その研究プロジェクトとして、この塾の視点から学校教育をとらえ直すということをやって

参りました。

そこで今回は塾の視点からのご発言と学校の側からのご発言、そして更にそこに国際的な視点からの問題の提起ということで、それぞれ韓国、アメリカの方をお招きしまして、そして最後には一つ総括的なところで、社会学的な視点というところで、初めに5人の方にそれぞれお話をいただきまして、後程お二人の方に指定討論者としてコメントをいただくということになります。

お話をさせていただく順番に、これから今日ご登壇いただく皆様方のご紹介をしたいと思います。まず私のすぐお隣ですが、最初にお話をさせていただきます倉井優臣先生です。倉井先生は現在愛知県の東郷町にあります絃文塾と言う塾をなさっております。塾のお立場から最初にお話をいただきます。

続きまして、そのお隣にいらっしゃるのが佐藤雅彰先生です。佐藤先生は静岡県の岳陽中学校の校長をなさったあと、現在は民間の教育活動等を続けていらっしゃいます。佐藤学先生たちの「学びの共同体」ということで中学校の改革をなさった先生のお一人です。現在、当臨床センターの協力研究員もお願いしております。

それから向こう側に移りまして、車明姫さんです。車さんは今、東京にあります韓国人の子供たちのための塾、上智学院と言う所の塾をなさっております。日本と韓国という両方の教育事情についてもお詳しいということで、韓国の視点からこの塾の問題についてお話をさせていただこうと思っております。そしてそのお隣が、今日通訳をお願いいたします博士課程の申智媛さんです。

そして、そのまたお隣が今度は4番目にお話をさせていただきますローレンス・マクドナルド先生です。マクドナルド先生はメリーランド州立大学の国際教育センターの前の副ディレクターでいらっしゃいまして、今、フルブライトの研究員として日本の総合学習などを中心に日本の学校観察などを続けていらっしゃる教育研究者です。

そのお隣が原清治先生です。佛教大学の教育学部の教授で、教育社会学のご専門で最近学力論争についてもご本を出していらっしゃいます。この5人の方にそれぞれ大体15分から20分ぐらい最初にお話をいただきまして、そのあと少し休憩をはさんで、今度そのお隣にいらっしゃいます鹿毛雅治先生、慶応義塾大学の教職課程センターの教授でいらっしゃいますし、当臨床センターの客員教授もお願いしております。教育心理学のご専門ですよね。すいません。(笑い) 教育方法もやっ

るから、どちらでいこうかなと思って・・・。

それからそのお隣が山内乾史先生です。神戸大学の大学教育推進機構、大学院国際協力研究科助教授、最近大学関係でも名前が長くなって読むのにつかえるんですが、その助教授をなさっています。山内先生も原先生と一緒に先程ご紹介したようなご本を出していらっしゃる。社会学の視点からご発言いただこうと思っています。

それでは、私が長くしゃべってもしょうがありませんので、早速倉井先生からまずご発表いただきまして、最初に5人の方のお話を伺ったうえでと思いますのでよろしくお願い致します。それでは早速・・・。

倉井 はい。

荻谷 皆さんのお手元に資料が行っていると思いますので、その資料をご参照ください。

倉井 ここにまずあります「塾は学校を超えられるのか」という、ちょっとどぎつい題ですので、固有名詞が出てきてしまうと大変なことになりますので気を付けてやります。

まず「目標達成のための塾内活動」、目標ですね。これについて、まず「一斉授業」。塾で行われている一斉授業と、学校で行われている一斉授業との相違点を私の経験からしまして、しかも東郷町という、名古屋のベッドタウンでの話ですので、東京のようなこういう環境とはちょっと違うとは思いますが、恐らくほとんど日本じゅうでこのようなかたちで行われているのではないかなと思っているものを説明させていただきます。

今、学力低下と言われてはいますがけれども、今日初めてお会いしましたマクドナルドさんに先程お聞きしましたことは、向こうの小学校、中学校、辞書が使われているかということなのですが、きちんと使われているそうです。それから今、ここから拝見致しまして、皆様の年齢構成からいくと、かなりの方がちゃんと授業で辞書を使われた世代の方もおられます。でも、若い方の中には英語の時間に辞書を使ったことがない、「巻末のワードリストだけ見なさい」という教育をされている方も今は多いです。

それから塾の中で辞書を使うのがどれくらいあるかといいますと、ほとんどないというのが現状でして、特に高校生を対象とするような大手塾でも1度か2度は解説はされますが、その後の指導は全くないということで、実はこれは学校とほぼ相似形ということになってしまいます。東京はどうかは知りませんが、高校受験の時に内申点というものがどの程度なのか、どなたかお分かりになる方。皆様の中にご存じの方、おられませんか。内申点の割合ですけれども、大体どのぐらいの当日得点との兼ね合いはどんなふうになっているかということをご存じの方、おられませんか。東京はどうなのでしょう。

荻谷 半分ぐらい・・・。

倉井 半分ぐらい入っているわけですか。私、昭和24年生まれ、1949年生まれですが、内申点のない世代なんです。それから高校受験の時は9教科、全教科です。だから体育まで入ります。保健体育で、保健は保健であって、体育は体育で、バスケットボールのシュートをさせるとか、ドリブルさせるとか、そこまでやった世代です。先生に対しては非常に見苦しい面も現れたりする場合があります。内申点がないものですから、授業がつまらない先生は何々ちゃん付けで呼ぶ。それからそれらしい授業をされる方には廊下ですれ違う場合でも敬礼状態です。だから、こういうような感じでした。

今の内申点できゅうきゅうしている中学生を見ると、ちょっとこれは教育と呼べるのかなというところがあります。それから今、高校3年になる生徒がいますけど、この生徒が中学校3年の時点で英語は毎回1番取り続け、数学が一番悪い時で第3位という成績だったんですが、内申点になりましたら1教科5点満点×9教科で最高点45において22です。22で地元の学校も当然のことながら落ちてしまいました。これは落ちるということを知りながら一応受けたわけです。それで、私立の高校の場合は2派に分かれまして、内申点重視というのをうたっている所と、内申点全く関係ない所と。だから、試験で全責任を負うのは私たち学校側だという態度で臨まれる所は内申点無視です。内申点無視で、愛知県ではまあまあの私立へ今行っていますが、英語の成績、聞いてみますとリーダーのほうで1で、オーラルが2位ということで全然得点も下がってませんし、数学も第2位から第3位というふうでずっと優秀なままです。

それでも、辞書を使っているのかという点では、今はほとんどの塾では

使われていませんし、それから学校の授業でもほとんど使われていないです。だから塾の先生からの「辞書を持ってきなさい」という指示が私の聞いている範囲ではありません、全然。ということで、一斉授業そのものもあまり変わりはない。

ただし、一つ言えるのは、塾が優位に立っているなあと思うのは、ほめることです。ある大手のチェーン塾なんですけど、おまけにその塾へうちの卒業生が講師として採用されまして授業をやっておりますが、「一番大事なことは、生徒ができた場合にどうするか」というマニュアルがありまして、「よっしゃ、ようやった」と、こういう言葉遣いでやりなさいと。「女の人もそれをやるんですか」というふうに聞いたら、「それはあんた、自分の好きなように考えなさい」と。今そこで活躍していますが、採用試験の時にうちの塾で習った程度のことを言っただけで「即戦力」ということで、一度も指導を受けずに今もやっているそうです。

次ですね。『宿題』における学校との相違点」ということなんですけど、最近は学校のほうも宿題の量がかなり、年々といっていくと、少なくなっています。それから公立の学校で愛知県じゅうに名前がとどろいている東郷町の東郷高校というのがあります、かつて体罰ですごい学校だったんですけど、今はその体罰がほとんどなく、一番学校らしい学校、本来の学校の姿に戻りつつあるなあという所でも、前は宿題の山でしたが今はほとんど宿題も減ってしまって、あまり出さないような状況にはなっています。

それから高校のことでいいますと、私立の、順位でいくんでしたら一番トップの所と、それから第2位のレベルの所と第3位、第4位とこう続くわけなんですけど、第1位の所では適量ですね。本当に適切な量です。それから各教科出されるのをちゃんと教職員のほうで決められるそうです、配分を。それで実際に先生方も解いてみて、これぐらいの量でやれば1日に1時間半とか2時間でやれるなという量を計量しながらやっている所もあると。

一番問題になるのは、第2位に着けているような所になりますと、今度は宿題の量が異常に多いわけです。ということは、たくさんやっていかないといけないものですから、どうしても全部やっていると時間が足りません。それで先生は大体ほとんどめくら判を押してくださるそうなので、「とりあえず出せばよい」ということで、学校へ早く行ってだれかのを写させてもらおう。それからもうちょっと組織的にやろうと思えば、みんなで「君はここのページ、やっておいてね」ということで、学校へ早く行って何とかかんとか間に合わせをする。それから授業方法もまず一番気になってし

まうのが学習法で、つまり勉強するのにもっとも効率の良い正しい学習法ではなくて、物量でいくんですね。物量でいって、おまけに「暗記しなさい」と。「この理由はなぜですか」ということに対して答えられない。「とりあえず暗記しなさい」と暗記の一点張りだそうです。

それから、宿題は高校の場合は行っている学校によってかなり差がありますが、塾のレベルで見えますと、塾と、一般的な公立の学校で、しかも中学生を対象としているということにおいて言いますと、宿題も年々減っているなあという気がします。

それから一部のかなり上位の学校を目指す場合は、塾の場合はかなり相当量ありまして、いろんな本当のことを言いたいんですが、僕はあまりにも本当のこと言ってしまうと、固有名詞を出したりするとなかなか危ないものがありますので、その辺はご容赦いただきたいと思います。

それから『テスト』における学校との相違点ですが、これも非常に難しい問題があって、いわゆる「あそこに行くといい高校へ行けるぞ」という所の指導方針として、テスト前には、愛知県の中学の場合には場合は習熟週間というのが始まりまして、部活動もはやばやと1週間前からなくなるわけです。その間に塾も開いて、一番長い所でいうと、僕が知ってる塾では午前3時とか4時までテスト前の追い込みをやるわけですね。当然のことながら内申点は非常に高いです。僕が見ても驚くぐらい高いんです。「ほとんど第一志望に入れるぞ」と豪語しているだけありまして、入れます、実際に。入って、その後のことは親御さんはあまり追跡されないようですが、僕が知り得た範囲内でいくと、あんまり芳しくないですね。中学校範囲だからめったやたらに暗記することができましたけど、高校行ってからその方程式が全く成り立ちませんので、うまくはいかない。

それから愛知県で1番、名古屋で1番と言われる、名前言わないようにしないといけないか、「何とか高校」にしましても、第一、第二志望まで入れての合格者が大体30パーセントぐらい、あとの7割のところは駄目だというような状況にあります。これは東京では当てはまるんでしょうか。どなたかご存じの方、おられませんか。

それで、塾の集まりなんかで僕も前は行っていたんですが、2、3回行ってそれから行く気がなくなりまして行ってないんで、今の状況と正しいのかどうかというのは分かりませんが。「倉井さんの所は何々中学の過去問を何年分持っておるか」と、「え、中学校の過去問って何ですか」とお聞きしたら、「中間・期末テストのテスト

だよ」という返事が返ってくるんです。で、「うちは10年分持つとる。何々先生はどっかへ、同じ町内で今度ここへ行つとるから、あそこの対策も万全だ」という話で、それが自慢の種になってしまうわけです。だからそれをしっかり持っている塾がいい塾と、親御さんのほうには映るようです。

もうこの辺は、僕はもともとサラリーマンでしたので、ちょっとびっくりで、「塾業界というのはなかなか恐ろしいところだなあ」と、「へえ、そこまでやるのか」という気持ちがありまして、お付き合いは本当にしづらいですね、今は。

テストはそういうふうで、だれだれ先生まで名前を名指しでちゃんと塾のほうでデータを持っています。それから、そのデータの処理の仕方ですが、塾講師がそれぞれまたそれを持ち寄って自分たちで正解を出すのではなくて、どういうふうに出すかという、塾の中で一番成績のいいのがいますよね。それにお願いをするわけです。だから「今度、宿題、中間・期末テストの資料が出たらそれをください」ということで、それを渡すとどうなるかという、ノート5冊、鉛筆何本とか、ボールペン何本とかいうのをいただくらしいです。それに選ばれることも非常に名誉なことらしいんです。だからそれをそのまま解答にしているわけです。塾から何か新しい視点を加えるとか、新しい説明を加えるとかいうのはあまり聞かない話です。

自分で塾やっておりますながら言うのも変ですが、ほとんどの塾、9割以上はこういうふうではないかなというふうに思います。辞書を使う塾はないというところから見ても、そうではないかなというふうには思っています。

それから「目標達成のための塾外活動」ということで・・・、大丈夫ですか、こんなに恐ろしいこと言っちゃって。(笑い)

荻谷 お任せします。

倉井 「『私立中学、私立高校』対策」というのがありますが、先程お話ししたような塾の組合というものがあまして、そこへ行くかどうかという、塾の中にはやっぱりよくできる生徒もいるし、そうでないのもありますよね。ということで、抱き合わせでお願いしたいと。この「抱き合わせでお願いしたい」という意味が分かるまでには、ちょっと時間、かかりました。それはどういうことかという、「1番2番系を渡すから、この下のほうのこれもひとつ抱き合わせでお願いしたい」ということで、推薦がかなりの率で決まるそうです。その塾長さんによると、「ほぼ100パー

セント」ということも豪語しておられます。

今度は逆の立場から見ますと、『私立中学、私立高校』による塾の取り込み」というのがありまして、私立中学、私立高校さんが説明会を開くわけです。僕が初めて参加した所は、大きな会場を設けられまして、大体400人ぐらいの塾の関係者、経営者と、中学3年の、公立中学の一番最終の担当の方、学年主任と言われている方々を招いての説明会があったんですが、かなり燃えてますので割れるぐらいの音で、耳が痛くなるような状態で説明をずっとし続けるんです。最後終わってから、僕はここへ来るべきではなかったなあという気もしながらの話ですが、出口に菓子折りのようなものがありまして、それを僕はいただきましたが、そのあとに封筒がありまして、封筒を一人一人の胸に入れてくれるわけなんですよ。封筒を入れていただいて、僕は「何だ、これは、また次も来いという誘いかな」と思って取り出しましたら、お金が10万円入っているんです。ということは、400人としまして1人に10万円ずつ渡すにしても、4千万というお金がどこから捻出されているのかということも非常に気になる場所ですし、それから僕がそこへ出て何かを説明した、それからその学校のために貢献したということでもないので、僕はすぐ担当の方を呼んで、「これは僕は取れませんよ。まあ、お菓子ぐらいはいただいときますが、これは取れません」ということで返しましたら、「今まで長いことやってるけど、あなたのような人は初めてだ」ということで、本当にこの業界は恐ろしいなあと思いましたが、その先生、そのあとからずっと私の所へ、「そこへ行かせる予定は僕の塾にはないよ」と言っているにもかかわらず、今の問題点を熱く語ってくれます。ところが最近、進学実績がちょっと伸び悩んだということで、減俸にされてしまっているというふうなんです。いろんなこういう塾業界の話もその先生からいろいろ聞けるんですが、話半分として聞いて、その更に半分と考えると、なかなか塾というのはしたたかなところだなあという気がしますね。

それから『合格率アップ』のための秘策」とありますが、学校の場合は学校さん独自で考えられてやるわけですが、塾の場合は学校というものがなければ何もできない存在なんですね。自分で考えて問題を作るわけでもないということで、すべてこの前の相撲で言うと、「だれのまわしで勝負しているのか」ということになっちゃいます。

それから一番目立つのは、英語の辞書使わせないということと、それと連動しているかのように、高校の先生でもこう単語の品詞や働きを調べず、ただ単語の和訳しか調べさせないということになっちゃうんです。まず、英単語を調べますよね。で、英単

ん語の調べ方も子供たち、知らないんです。辞書の上部の左右の端に載っている単語の範囲内に調べたい単語がなければ、さらにページをめくればよいということも知らないわけです。ということで、めったやたらにめくってしまう。私は小学校1年生で代用教員であったお寺の住職から教わって、もう辞書の使い方は慣れてましたので、上の部分だけ小さく開いてみて、調べたい単語のの近辺へ行ったらそのページを見るというのは常識として知っていますが、今の塾生のやり方を見てると、全体を見ながらめくるものだから、僕と比べると4倍5倍ぐらい時間がかかってしまいます。こんな基礎的なことさえ教えられていないと、僕は、非常にこれは問題だと思います。

それから高校でかなり上位校の場合、ここに英単語がありますよね。で、生徒が一番見るのは太字で書いてある和訳です。和訳をいくつも書いていくわけです。それでこの和訳を組み合わせたやつで、組み合わせで解くわけなんです。で、こういうことをやる先生がほとんどだということで、うちの塾生の、なかなかこれはしゃれてる人ですが、それは理系の生徒で、「先生の組み合わせでいくと、これは168通りでできてしまう。168通りの組み合わせの中から一つを選ぶのはどうしたらいいですか」とお聞きしたところ、「国語力で考えなさい」と。

確かに英語を訳すとき、国語力も必要ですけども、文法力も、構文力と言っているか、そういうものが必要になると思います。で、そういうこと一切無視で「日本語で考えなさい」と。それである日ある高校の先生がご自分のノートを教壇へ忘れて行ったわけです。しゃれてる子供たちですから、すぐコンビニに走ってコピーしまくりで、次からそのクラスはかなり良い得点だったという話も実際に聞いています。

ある日、職員室に質問に行きましたら、その先生が予習の真っ最中で、何をやっているのかと後ろに立って見てたらしいんですよ。そしたら和訳を一生懸命つぶやいてるんです。「これはこういう和訳や」とばーっとやりながら。「あ、そうか。先生は教室へ来られる前にこうやって覚えてるんだ」と、ちょっとびっくりしたらしいんです。そういう先生方が今はちょっとずつ出始めているというのも非常に問題点ですし、例えば「何々を見る」というとき、「ルック・アット」と来ますよね。それから「探す」というとき、「ルック・フォー」としますね。それから面倒を見るとき、「ルック・アフター」としますよね。なぜこれでなければならないのかとか、なぜ世話をするときに「ルック・アフター」ではならないのか、そういうのを教えてもらったことがある生徒は、ほとんど、皆目ゼロ状態です。ここの中で分かる方おられますか？「ルック・フォー」が、「探す」という意味が出るというのは、どこから出るのかという……。マクドナルドさん、どうでしょう。(笑い)「探す」という意味は。

マクドナルド 探すという意味・・・。

倉井 はい。どうしてこれは「ルック・フォー」なのでしょう。

マクドナルド いや、分からないね。

倉井 ね、ネーティブな方は知らなくてもいいんです。(笑い)

マクドナルド ありがとうございます。

倉井 日本人は分析好きですので、この分析というものを使っていくと、非常に面白い授業ができるんです。例えば「at・on・it」を使っていくと、あっと驚くようなことできてしまって・・・。すぐに塾口調になっちゃうんです。生徒には覚えやすいように、記憶術の一つ、「アトニン」と唱えながら三角形を描かせます。するとここに弓矢の矢が出てきますね。弓矢の矢が出てくるということは、矢の先は細いほうがいいわけです。「細い」、だからこれは「狙う」という意味で、視線を飛ばすようにして「狙う」ということです。それでこれは時間にも使えます。例えば「7時に」というとき、「at seven」という。「at」が来ますよね。それが、1時間が24集まると、1日ですよ。こういうところに日にちの場合は「on」を使う。それから1日が7つ集まれば1週間ということで、1週間から先はみんな「in」でいいんだと。[1987年に]という場合に使う前置詞はinを用いて「in nineteen eighty-seven」と、こういうふうに使えるというふうには。あんまり上等な例ではないですけど、そういうこともできる。

それからこの「for」というのは、もともとはサッカーとかラグビーかな。それで「forward」というの、ありますよね。ということは、これはもともと「前へ」という意味が出てきて、「前へ」出てくるから「for me to doのように不定詞の主役も表すことはできますし、「前へ出ていく」ということは、「追求」の意味が生まれます。後ずさりしておったんでは、学問でも何でも、追求することはできません。この「求める」という語義がありますから、「求めながら見る」ということで「look for」は「探す」になる。「look after」と「take care of」ってありますね。これ、どちらも「面倒を見る」、ほとんど一緒でないかと。look after と take care of の違いは多分ネーティブな方には分らないと思いますが・・・。お分かりになりますか。はい。ということでネーティブな方に僕がこれから教えてあげます。(笑い)

マクドナルド はい、お願いします。(笑い)

倉井 よろしく。

苺谷 先生、そろそろ時間の関係で・・・。

倉井 はい、これで終わります。

「take care of」、やめておきましょう。ということで、詳しい説明をしながら学習させる。これが本来の一番正しい姿だと思います。そのためにも辞書を使うこと、参考書を使うこと、こういう大切なことをもっともっとどちらも教えるべきだと思います。学校、塾、問わずですね。そうしないと正しい連携ができないと思います。以上です。よろしくお願い致します。

苺谷 どうもありがとうございました。せっかくのお話なのに時間の関係でこちらで話の腰を折ってしまいましたが、皆さま方からいろいろご質問とかご意見もあろうかと思いますが、時間の関係もありますので最後の総括討論のところでご質問を受けますので。続きまして、佐藤先生のほうからお願い致します。

佐藤 それでは、中学校と小学校の校長をやった経験でお話を致しますので。どちらかといいますと、高校の生徒の気持ち等はあまり聞いておりませんので、ご容赦願いたい。

最初にお話ししたいのは、学校と塾の違いのです。非常に簡単でして、学校教育法の第1条に載っているか、載っていないかで決まってくるだけのことなんです。学校教育法の第1条に「学校とは」と書いてあって、その中に塾はないわけです。そう思えばいいわけです。そうすると今度は、その教育法の第1条に載っている学校は、実は文部科学大臣の指示を守らなきゃいけないという設置基準があるわけです。塾はその設置基準に従わなくてもいいということですね。結論を言うと、何をやってもいいということなんです、簡単に言えば。そういうことです。それをまず大前提に置いていただきたいということが一つです。

そういうことで、私が現職にいた時に塾をどう見ていたかということを中心に、私の周りにはいる先生方のお話をまとめてみたものが二つのことに、その1番と2

番がどう見ていたかということです。

三つ目は、本当に私個人の考え方で課題というか、問題というか、そういう提起をさせていただきたい。

最初に倉井先生から調査書の話も出てきましたけれども、調査書の問題というのは各県によって趣が違います。ですから、東京都がどうであれ、「静岡県が」と言ってもなかなか話が伝わらないような感じがするんです。ただ静岡県の高校入試は、公立高校に限ってお話をしますけれども、前期と後期がありまして、前期はどちらかという調査書が重視です。最近はそれに各学校が基礎学力を試すという、各学校で問題を作る。なぜこうなったかという、どうも調査書が信用できないということが一つあるのではないかと。

後期の試験は、調査書とアチーブメントテスト。アチーブメントテストは県下一斉の問題ですけれども、相対評価から絶対評価に変わった時に、各学校を受ける生徒は、大体粒がそろってくるわけです。ですから差が出ないんです。調査書は5段階評価でいきますね。そうするとある〇〇高校を受ける生徒の調査書を見ますと、ほとんどオール5とか4と5だろう。そういう子供たちが受けますので調査書で差が出ることはないです。そうすると、結果的には当日のアチーブメントテストが非常に重要視されるという結果になるわけです。

そこでどうなるかという、①番ですけれども、子供たちは不安になるわけです。親も不安になるわけです。このままいって〇〇高校に受かるだろうかとか、大学で〇〇大学に受かるだろうかとか、そういう不安になるわけです。しかも、こういうことを言っただけですけれども、チラシ（広告）を見ますと、もうあおり行為ですね。こう書いてあります。「塾へ行かないと有名高校、大学に進学できない」と。二つ目は「塾に行かないと学校の勉強に付いていけませんよ」と、甘い声でささやかれますと、つい乗ってしまうということもありますね。

で、一番下にも書きましたけれども、先に5番のほうですけれども、「ゆとり教育」とあります。今、ゆとり教育によって、非常に塾が活性化されたのではないかと私は思うんですけれども、学校の勉強だけでは、「だけでは」ということですね。「～だけでは有名高校にいけない」という、そういう言い方します。「だけでは」と付きます。

それから「学力」といえば「学校の勉強だけでは学力が着かない」と、こういう書き方をしています。要するに「学校だけでは駄目ですよ」と簡単に言えば、そういうことですがけれども、こういうことはどうかなと私は思いますけれども、これは学校の外でやっていることですから文句の言いようもないところもあるわけですがけれども。

次の三つ目のぼつですがけれども、これは「優秀な子供ほど多い」と書きました。「学校は自分の力をじゅうぶん伸ばしてくれない」と、こういう意見もあります。確かにそういうことも感ずることはあります。それから「あの友達が塾に行くなら私も」と。これは友達に誘われてというか、何か不安になるわけです。友達が、あの子は行かなくてもいいだろうと思った子が行くと、自分が負けてしまうんじゃないかと、そういう不安感だと思います。

それからその次に、「学校教師の授業力」、荻谷先生のお言葉を借りれば「教師力」ですがけれども、「教師力が低い」という先生もおられる。実際におります。現場の中ではそれをどうするかということは、非常に大変な思いをして先生方と対峙していくわけです。

二つ目、意外と多いのが「社交場に使っている」と。逃げ場ということですね。「お友達とおしゃべりをしたい」。大体の学校側で、「個に応じた」とか、「個性に応じた」と言って、個に閉じたような教育を致しますから、仲間と仲間がある知識を分かち合うというようなことよりも、何か個別に動いていく、ばらばらにされている。だからうちへ帰っても、最近どこへ行っても子供が遊んでいる姿見えないわけですね。どこにいるんだろうかと思うくらいみんな個別になっているわけです。そこで夜、友達とおしゃべりをしたい。勉強するわけじゃないです。親は「今から塾へ行くよ」と言うと安心するわけですが。安心して行かせるわけです。その実、子供はうまくそれを使っているわけですね。

それからもう一つ、「親の過干渉」。最近是有名高校とか大学行かせたいですから、とにかく「塾へ行って勉強しなさい」と言う。盛んに言います。ところがそういうことから逃げたい。特に塾に行けば逃げられるわけですから、そういう子供もいるということですね。

③番目は「補習」のかたちでいく。これは有効に機能しているのかなというふうに思うんですがけれども、大体家庭学習をやらないわけですから、家庭学習が、この間の

荻谷先生の調査だったのでしょうか、ゼロ時間が2割という報告があったような気がするわけですが、非常に家庭学習の時間がない。それから「家庭学習の仕方が分からない」。中には非常にまじめに「できるようにになりたい」と、学校だけではなく塾で勉強を更に続けたいと、こういうふうに考えておられる。

それから④番目の所ですけれども、「さまざまな問題を抱えて」ということですが、フリースクールとかいろいろなものがありますね。これは、非常に学校としてはありがたいと思っています。こういう場所があるということが、子供たちにとっていいかなと。本当は学校の中でそれができると一番いいと思うんです。⑤番目の所はお話をしましたので、飛ばしたいと思います。

次、「功罪」というような、きつい言葉を使いたくなかったんですけども。もし、塾に行っている子供を、学校から見たらどうだったのかなと振り返って見たときに、+①という、プラスはいいほうに、と思ってください。要するに「家庭学習を補う」ことができる。それから前もって「予習ができる」。それから「個に応じた指導が受けられる」。こういう点では利点があるのかなあというふうに思います。

今度マイナスのほうを考えてみますと、「成績の芳しくない子供が無視されている」のではないだろうか。要するに一部の塾ですけれども、全部の塾ではありません。そこは大体入塾テストがあるんです。そして低学力層がほとんど切られるわけですね。入りたくても入れないわけです。それはなぜかということ、その塾が〇〇高校何人、〇〇高校何人ということの効果として出したいわけですね。だから低い生徒を入れたらその数が減ってしまうわけですから、最初から入れないということです。

これもよく調べてみますと、私、好きなものですから、いろんな塾の〇〇高校合格者数を全部合計していきますと、定員募集よりも多くなってしまいます。つまり自分の塾へたった1回だけ来れば、自分の塾で指導を受けたというふうにとるわけですね。ですから、非常にごまかしも入っていることもあります。けれども、見た親はその数に圧倒されて、大体数の多いほうへ希望するわけですね。そういう所は大体優秀な子が希望しますので、ますます入塾が大変になる。それからそういう塾は、「志望校別クラス編成」というかたちを取っていくというような、これは静岡県私の地方の塾ですね。

実は東京都の子供たちはどうか分かりませんが、私たちのような田舎はそんな

なに塾は、行っている子ばかりではないですね。5割の子が行くという、そういう感じな所。それから私、九州のほうの学校も行きましたけれども、九州の学校でいきますと、山あいの小さな学校で塾がないという所もあるわけです。そういう所の生徒もいるわけです。だから今日の話でいくと全然関係ないというところもあるわけです。

その次、②です。予習ができるということは非常にいいように見えますけれども、前もって教科書をやっておくわけですね。そうしますと、例えば数学でしたら問題もやり方も答えも全部分かっているわけです。その子たちが授業を受けたときに全く同じことをこういうかたちで授業されたらつまらないわけですね。その子たちがさっき言ったように、「学校は自分の力をじゅうぶん伸ばしてくれない」というかたちにつながるわけです。

要するに「教材が、出会いが楽しくない」んです。同じことを同じ繰り返すわけですよ。ですから楽しくない。やっぱり学ぶというのはどきどきはらはらしながら受けるというのがいいと思うんですね。次は何出てくるんだろうとか、次は何を考えていくんだろうとか、そういうことが勉強の楽しみだと思うんです。私が、自分が勉強したらそうだと思うんです。全部分かっていることを、おさらいのようにやっている学習だけだったとすれば学校はつまらない所になってしまう。

②番、③番は同じことです。④番目は「順位、できるかできないか」、こういう価値観が塾通いの子供たちに多いような気がします。あの子よりも勝ったとか負けたとか、この問題ができたとかできないとか、学問するということ、学ぶということはどういうことだろうかということではなくて、結果だけなんですね。結果に至る過程が大事だと思うんですけれども、「過程が大事だよ」と言いながら、結果的には「答えの間違いは×」と、こうなっちゃいますね。

でも、本当は学ぶ喜びということはその過程の中にあると思うんです。残念ながら入試というのは結果だけで見えていきますから、そうもいかないところもあるわけですが、こういう価値観がやっぱり植え付けられてしまう。テストをやりますと、「先生、何番？」と必ず聞かれる。「君、テストの何番を付けるためにやっているんじゃないんだよ」って言うと、「何番ぐらいか分からないと、私、どこの高校へ行けるか分からない」と、こういうふうになるんです。「大丈夫だよ」と言っても、どうも何か学校を信用してくれないというか。順位でないと信用できない。そういうふうになってしまった。

それから⑤番目の「階層差による不平等感」ということです。塾の費用は非常に高いです。で、「出せる親」と「無理して捻出」というのがありますね。「この親、経済的に大丈夫なのかな、」という親がいるんです。そういう親は大体夜遅くまで働いて子供は塾に行っている。そうすると家庭の中でぬくもりだとか、家庭教育の中で育っていくということはおろそかにされるわけですね。ただ単に学力だけというような、人間を育てているというか、人間形成はどうしているだろうか、というようなところが心配です。

その次は「出せない親」と書いてあるんですけども、この子供たちが一番かわいそうですけれども、一番頑張る子です、正直言いますと。「僕は塾に行っていないけれども学校で頑張るよ」、学校というのはこういう子供たちの為にあるんだなど、私も自分が現職にいた時に思いました。塾へ行かなくても済むような学校にしようと、そういうふうに思ってやってきたわけですけども。

さて、最後ですけども、三つ挙げましたけれども、学校と塾の違いを言ったわけですから、括弧書きが私の気持ちです。塾がいいとか悪いとか、どうでもいいと私は思っているんです。なぜかという、塾は、お金を払ってその子供たちが行くわけですね。払った子供に対して責任を負っているわけです。学校はそうじゃないです。学校はただ単に学力だけ上げようと思っているわけではないわけです。もっと違うことまで含めて、よりよい人間形成をしているわけですので、先程、倉井先生は効率よくテストをクリアするにはどうしたらいいかということをやるとしても、学校というのはそれだけを教えるところではないです。ところが、塾が価値観を変えていきますから、本来の教育ができなくなってくるという。それから教師そのものにやっぱり本当の学びを追求していくような力が弱くなっているんじゃないかなというふうに思います。

そこで、②番に行くわけです。「学校が塾化していく」ということですね。要するに先生方の指導力がないものですから、どういうふうになっていくかということ、一番下ですけども、最近「公立学校の教師が予備校で指導法を学ぶ」というような計画をしている県もあるようです。ある高等学校の先生に聞きましたら、この春休みに予備校へ行って指導法を習う。予備校に行って学ぶということは括弧書き、これだけじゃないと思うけど、暗記とか、ドリルとか、やり方のテクニックとか、こういうことが主体の指導法なわけですね。それを学ぶということですので、本来の教育とはちょっとはずれていくように私は思います。

二つ目はその上のぼつですけれど「優劣を時間で競う」。その右に「大村はま先生の遺稿詩『優劣のかなたに』」と書きましたけれども、最近亡くなりました大村はま先生の一番最後に残した詩が「優劣のかなたに」ということでした。要するに学校というのは、できるとか、できないとかそういうことで人間を区別するのではなくて、そこに至るまでに努力した過程を大事にすることです。その中で学ぶ楽しさを味わったり、学ぶ喜びを味わったり、そういうことをすることが大事なんだというふうに大村はま先生はおっしゃっているわけです。もちろんできるということは楽しみになるわけですが、もっと違う意味の楽しさとか、喜びとか、そういうものを与える必要があるのではないかと。あるいは仲間を支え合うとか、仲間に支えられたとか、そういうことも含めて学ぶべきものがあるのではないかなと。

最後ですけれども、時間が来ましたので、「学校が主体性を発揮できるか」ということですが、やはりこれからの学校は一人一人の子供をどう育てていくか、その子供たちの学びとそれから人間的な形成にどうかかわっていくかということを実際に考える先生方をもっともっと増やさなきゃいけない。だけれども、先程言いましたように、ちょっと教師力が落ちてきているのかなあという感じも致します。地方分権下になったときに、要するに財源力が弱い県が優秀な教員が取れなくなるということだと思って考えられます。ますます地盤沈下していく。そうするとますます塾が繁栄するという感じもするわけですが、塾に頼らない学校を私たちがこれから作っていかなくちゃいけないというふうに思います。

大変早口で短い時間で申し訳ありません。以上です。

苅谷 どうもありがとうございました。本当にこちらの構成をする側の責任で、それぞれの先生方、本当はもう少しゆっくりと時間をかけてご発表いただきたいし、また皆さん方からもそれぞれの個別でのご質問をお受けしたいんですが、時間が押しておりますので、最初に申し上げましたように、総括討論のところで質疑というかたちで進めさせていただきます。

それでは続きまして、今度はお二人、海外の視点からということで、最初に車先生から、韓国という視点から日本の塾、あるいは韓国の塾についてお話を伺いたいと思います。それでは、よろしくお願い致します。

車 アンニョンハセヨ。こんにちは。車と申します。(以下、車先生の原稿より引用) お目にかかれて嬉しいです。

日本で暮らしてはいますが仕事の性格上、ほとんど韓国と同じ

生活環境ですので日本語があんまりうまくありません。
ご理解よろしくお願ひします。

まず、韓国の教育熱は世界でも例をみないほど加熱です。
父親の1ヶ月給料以上に教育費として支出される家庭も多いし、
良い学校がある地域の住宅・マンションは同じソウルでも10倍以上の値段で取引される異常ともいえる現象をみせています。
名門の学校を固執する韓国人の教育背景にはいろんな理由があります。
まず、歴史的に韓国の朝鮮時代には、ヤンバン・スンビ・農業・工業や商業を職業とする人、賤民(階級の一番低い人)の身分階級がはっきりと区分されていました。
ヤンバン出身で勉強のうまい人は富貴永世が保障されるから勉強を重要視するしかありませんでした。

2番目に、韓国の伝統思想は儒教思想に根幹をおいてあります。
親孝行と礼儀を重んじるようになりました。
親の志を慮って立身功名するのはすなわち、出世は最高の親孝行としてとらわれたのでまた勉強です。

3番目に、韓国は非常に小さい国でありながら人口密度が高いです。
10万平方Kmも満たない国土に4800万の人々が住んでいます。
学校も会社も競争です。母親たちの話題のほとんどは子供の教育問題です。

これからは、いま現在韓国の教育に対して大きく分けてはなしをしたいと思います。
学校教育は日本と同じく6・3・3・4年制で入学時期は3月です。
高等学校はいろんな目的に分類されています。
大多数の一般人分系、実業系、工業系、商業系の学校を除いては試験に試験を重ねて天才・英才だけが入学できる民族士官学校、科学高等学校、外国語高等学校などがあります。

授業の形態、方法もさまざまです。
民族士官学校の例を一つ紹介すると、1クラス15名で教師:学生の比率は1:5です。
個の学校の最低入学条件は全校成績優秀者の1%以内、Toefl240点 Toeic 800点以上、Teps710点以上、各種の競試大会入賞者です。全寮制でもあります。
大学への進学はスウル大、延世大学 などの名門ばかりです。
この以外にも芸術高校(音楽、美術、体育)などがあります。

また、もう一つ海外早期留学が社会現象として現れています。

韓国の特殊目的高校ではなく、平均化された教育の短所を海外語学留学で解消しようとするようでございます。

年に1万名以上が小中高のとき親につれられ海外早期留学に出かけています。ドルの消費が深刻の社会問題ともなっています。

子供だけが留学に行くか、母親がついていく留学で父親だけが韓国にのこって経済的支援をしながら家族がはなればなれに住んでいる父親を「渡り鳥パパ」とも呼ばれる新生語までうまれました。

これからは、学院(学習塾)に対してお話いたします。

学校教育だけではまかなえない問題点をうまくキャッチし、それを解決した目的のはっきりしたプロ集団ともいえます。

A という学生を B 大学に入学させる。

C という学生を Toefl 何点以上とれるようにする。

学校の試験、国家試験に 100%合格を目標にする。

韓国ではこれといった学院では家から塾、塾から家までのシャトルバスも運行しています。

授業ももっと専門的な講師たちがレベルに合わせた授業をするためその効果が現れるしかないし、予習をしておいた学生の場合は学校の授業がおもしろくないのは当たり前です。

青少年教育相談院の 2001 年の統計では授業中 1 日 1 時間以上寝るが 18,6%と出ています。

その時教師たちの反応は 少し注意して起こす 48,9%、そのまま授業を進行が 23,3%、きびしく体罰が 2,4%

寝る理由として主に、面白くないから、疲れているからでした。

最近では出版社や企業からでも学院を経営事例も多いです。

そして、学院では TV 及びインターネットの映像講義などサイバー教育が一般化されています。

どんどんはやいスピードで学校教育の水準を追い越していくことになります。

最後の結論で国家と学校、学院が相互補助的関係を維持する教育方法を提示します。

1、 国家的次元の特殊目的高等学校を設立することです。

教育は被教育者の潜在性をみつけ出させることです。

人材を養成しなければなりません。勉強の意欲が高い学生の要求を満たさなければなりません。(韓国のソウル大の Brain21 が世界的におどろくほどの学問の実績を挙げている点)

これからの世界は創造的な専門人材が国家競争力強化の牽引者になることを認識し多様で差別化された教育をしなければなりません。

日本のトヨタ自動車で「イトンスクール」設立で次世代のリーダーを養成するという計画はとてもいい見本です。

2、 学校教育は改革・革新されなければなりません。

学校は自律化されなければなりません。アメリカのブッシュ大統領の「No Child Left Behind」学業成熟度低いというのはけっして失敗ではありません。

教育の体制ではなく教師は学生に奉仕しなければなりません。

非能率的な教育体制を見直さないといけません。

教師教育の効果的、学習戦略のプログラムを開発しなければなりません。授業の動機が付与され、学生との共感体の形成に努力しなければなりません。

必要による科目、少人数の授業をしなければなりません。

(担任、副担任、補助教師必要)

宿題で動機を誘発させ、学習伸張の遅れた学生の補習の契機にさせなければなりません。(宿題プログラム、個人勉強、読書なども効果は大きい。)

学院の講師を学校の時間講師として採用。

学校は学校での基本教育に充実

能力別授業、すなわち英語の聞く、話しは外部の A 先生。国語の作文は外部の B 先生といった形式で研究します。

教師に行政的な仕事を減らし、学生に教育の愛情をもっと投資しなければなりません。

(成績管理)

教材の研究開発もできます。

教育は人を育てる過程です。教師の Mind、心構え、愛情のそなえられた行動力のある教師を養成しましょう。

荻谷 どうもありがとうございました。たくさんのご質問があろうと思いますが、先へ進めさせていただきます。続きましては、日本とアメリカの教育に造詣の深いマク

ドナルド氏にお願いしたいと思います。パソコンを使いますので。

マクドナルド みなさん、こんにちは。2時過ぎだ。私、マクドナルドと申しますから覚えやすい名前かと思いますが、よろしくお願いします。(笑い)

今日はね、マイク持つと何かカラオケ歌いたいと思いますけど、今日はまじめな話をしときます。さっき、最初恒吉先生と話し合っただけで塾の立場、アメリカの塾はどんなことで話したらよろしいかということ伺いまして、アメリカには塾がないっていうことでもう帰らしてもらいたいと思ひまして。でも、そんな簡単ではないんです。やっぱり競争力、けっこう厳しくなったし。今、さっき伝えた通り、アメリカの教育政策、基礎学力を上げないといけないう、高めないといけないう意見が強くなったんですから、これから塾は増えるかなと私は思ひます。

じゃあ、とりあえず、そういう子供たちの進学の方法、説明から話したいと思ひます。

まずは義務教育のことなんですけど、日本と違って5歳から、幼稚園から義務教育されています。ほとんど、6歳で小学校入学なんですけど、6歳ちょっと超えて、ちょっと早めに、もしかして9月で始まるんですけど、9月1日から6歳じゃないと入学できないということではないんですよ。もっと単純に、もし9月まで入学できないことはないから、そういうやっぱり相談して、行けるかどうか。子供の様子を見て、入る、入学するかどうか相談しますね。

6-3-3制度なんですけれども、私の高校、ミシガン州で生まれて5-3-4のかたちになりました。高等学校は4年間、こういう所があちこちにありますので、全部6-3-3ということとは言えません。義務教育は16歳まで、もしかして16歳になったらやめたいと思えばやめてもいいんです。16歳になったら、一応高等学校に行ってる間ですね、1年生か2年生、やっぱり日本と違って15歳で義務教育を、高校、高等学校は義務教育ではないんですけど、アメリカの場合は年齢として16歳ということですから、ちょっと違うと思ひます。

コンプリヘンシブ・ハイ・スクールを私、包括的と書いたんですけど、それではちょっと意味がつかみにくい。まあ施設が一緒、子供と同じ所で勉強するんですけど、プログラムが多様なカリキュラムで行うわけです。

例えば、アカデミー式が最近はすごい大人気で、例えば福祉関係、理数系、ビジュアルアート、美術系、それを一つの高校でいろいろなプログラムを行っています。子供が入学する時に相談しながら、「えーと、どっちにしようかな」ということに決めます。指導をされながら、先生方と相談して進学します。

次は、アドバンスト・プレースメント（AP）。高等学校の所に大学の単位が獲得できます。試験があるんですけども、いろいろなAPのコースがあります。だから、高校の時は大学の単位が獲得することができますので。

その次がマグネットプログラムが、一つの学校の中にやっぱり特別なプログラムがあります。もしかしてIT関係、理数系、芸術関係、どっちかに、優秀の子供たちがそういうプログラムで受けたい、勉強したい、それで入試はあります。そしたら、学区を越えて行くことができます。

最後は、インターナショナル・バカロレア・プログラム、これは国際的なプログラムなんですけれども、わざわざイギリスから、欧州から生まれたものと思います。最近アメリカの高校ですごい人気のプログラムなんですけれども。日本の高等学校にあるかどうか、私、分かりません。何かありましたら教えてください。

じゃあ、一つの例としてこの高校のプログラムで説明したいと思います。まずは簡易式なんですけど、インターナショナル・スタディー・アカデミーというものがありますので。五つがあるんですけども。一つとして、国際的な学習、外国語、ラテンアメリカン、アフリカンアメリカン、もしかして、中東、東洋の研究。どちらかと言えば、アフリカンスタディーズとか、アフリカン・アメリカン・スタディーズという言い方しますね。まあ、人類学、国際ビジネス、政治など、いろいろのプログラム、その国際的なプログラムを行うわけです。

2番目は、メディアリテラシー、視覚芸術かあるいは公演芸術、マスメディアというプログラムですから。三つ目のヒューマン・サービシーズ・プロフェッションズ・アカデミーって言うのは福祉関係、栄養学、看護、一般教養。で、犯罪学というのは、これ日本語でぴんとこないんだけど、クリミナリティーと言います。刑事になるような勉強なんです。まあ、どっちかと言うと心理学的な勉強なんです。サイコロジータ的な勉強だと思います。

それで、マス・サイエンス・アンド・テクノロジー、理数系、IT、コンピュータ

プログラミング、エンジニアリング、環境問題、いろいろ環境教育を行うプログラムです。五つ目は、アントレプレナーシップというところがビジネス学、マーケティング、広告、アドバタイジング、会計学、職場体験が一番大事にするですね。

それは一つの高校、対包括的、いろいろなプログラムが、五つのプログラムのどっちなかに高校生が決めるわけです。こっちにしたいか、こっちにしたいか。もう一つはマグネットプログラムということがありまして、特別なプログラムで理数系があったり、公演芸術などを受けるために、学区内と書いてありましたが、学区外でも可能です。ただ、メリーランド州だったら、郡ごとに学区が作ってあります。この高校が、一番下のワシントンDCの隣にある学校だから、もしかしたら郡の多くの所からこのプログラムに参加したいんだったら、入試を受けて、入学するんですね。ただ、理数系のほうが多いんですね。ITが多いですね。インフォメーションテクノロジーのプログラムが多くて、あと、芸術関係、公演芸術関係、パフォーマンスアーツというプログラムが多くあります、マグネットプログラムの中に。

アメリカの、日本と違うと思うんですけども、特に教育機関、学校以外の教育機関ですね。青年スポーツがあったり、教会、宗教の関係の活動。子供が、参加してない子供がいると思いますけれども、まあほとんどが、何割ぐらいか言えないんですけども、そういう触れ合い、学校以外のきっかけとして何か活動を行うわけです。青年スポーツも多いんです。野球、アイスホッケー。私アイスホッケー8年間やりましたんですが、昔。

サマーキャンプがあります。もう夏休み長いから、音楽関係、スポーツ、IT、あるいはいろいろなサマーキャンプ。お金かかりますよ。けっこう高いところもあると思うんですが。あとサマースクール、普通の学力足りない子供たちのため、一般教科、補習、特にESL、数学など、けっこう弱い面が、ほかの補習が夏休みに受けられます。

で、まずは大学にどうやって入るということにすると、アメリカの場合は一応入りやすいのが、みんな思われると思いますけれども、スカラシップ・アティテュード・テスト(SAT)は必ず受けなくちゃいけないんです。大学進学適正試験ですね。学力試験と違って、ちょっと説明しにくいんです、それ遠慮します。

SATリーディングテストという理論思考テストですね。三つに分けて、リーディングコンプリヘンション、読解、あと数学、作文。作文が新しいのです。最近出

てきたばかり、前は作文なかったんです。それぞれ1位から4番まで丸付けてくださいとかたちだったんですけれども、作文が最近できました。

その二つ目は、サブジェクトテスト、教科テスト。文学、歴史学、面白いのはジャパニーズ、コリアン、チャイニーズ、日本語、韓国語、中国語のサブジェクト、教科テストが実施されるわけですね。2007年、あと2年後。

で、得点、平均は500なんですけれども、大学のホームページ見るとどのぐらいの得点が取って入学できるということがほとんど書いてない。ただ、平均的にはハーバードだったら600から800までなんですね。でも、600取らないといけないとか、そうしないと申請しないでくださいとは書いてないんです。それ、いろいろあるから、SATの得点で入学できるかどうかは一つの測り方です。

じゃあ、SAT受験コースがあります。それはアメリカの塾と言えます。値段も書いてありました。900ドル、6週間、12クラス、36時間。日本の塾と比べたら高いですか、それともそんなものでしょうか。分からないんですけれども、それはSATのいい得点を取りたいんだったら高校生がよくそういうコースを受けます。まずは米国の大学、入学がしやすいでしょうか。とくよく、「入りやすいんだけど出にくい」とよく日本人が考えております。

これ、メリーランド州立大学が私の母校なんですけれども、受験者数ですね、2万人が一応申請しました。で、その中に、合格した人が4,100人、割合では、4分の1しか、入学できてない。それを見ると入りやすいと言えませんでしょうね。ただ、編入だったら、特に短大、短期大学2年間行って、その単位が高校4年の大学に持って行って、また入学するのはもっとやりやすい。というのは、受験者数が7,000の中に、半分、3,200人が入学できました。だから、これからは短大生が、今度はコミュニティーカレッジとかいろいろの短期大学があって、それで2年間行って、その単位を持ちながら編入するケースが多いと思いますよ。

じゃあ、最後の所なんですけれども、今の政策、ゆとり教育から、私、ゆとり総合的な学習のことを今見学しております。日本とアメリカは政策的には逆方向行っております。「ゆとり教育から基礎学力に進む傾向あり」、どう思うとか、やっぱり反対が多いと思うんですよ、学校の先生の中に。その「ノー・チャイルド・レフト・ビハインド」この政策は間違っていると考えている先生が多いんですよ。

まずは、3年生から8年生まで、学校が学力テストを行うわけですね。子供たちが分かってるわけじゃなくて学校がうまくいってるかどうか、学校の評価なんですよ。学校の評価が上がったら、悪影響、子供にストレスがたまらないという意見があるんだけど、そんなことはないでしょう。校長先生が緊張するからそれで、学校の先生が緊張すると子も緊張するんです。それ、うつってしまうから、けっこうみんな慌ててしまう状態です、本当に。

どんなかたちか、けっこう混乱します。私英語でも読んでもなかなか分からないですけれど、まずは「州基準を満たさない場合」。で、州ごとに基準が違う。低い基準を作ってみんな合格できる。だから、厳しい基準を作ったり、合格しにくい所があったり。連邦政府から「この基準にしてください」と言われてないんです。だから基準が、州によって基準が違うということがまずはちょっとおかしいと。

じゃあ、2年連続、なかなか満たさない場合だったら、学区内のレベルの高い学校へ転校できる、チャータースクールと含む。その学校がつぶれてしまう状態だったら子供をほかの学校へ行かせます。で、その上に交通費が学区の教育機関が負担するんです。もし、遠い所だったらだれがどうやって行くんですか、子供と。特に小学生が、バスがないと駄目だから、それでバスを手配するのは教育機関。

もし3年間で連続した場合、もし失敗した、満たさない場合、基準を満たさない場合、低所得家庭の子供たち、もしかして補習授業が受けられる。まあ、家庭教師が高いんだけど、放課後授業、サマースクールなど、そういう子供たち、基準を満たさない、うまくいけるのように補習学習が受けられます。それがまた、学区、教育機関の負担ですね。お金出すのは州からあるいは学区から出さなければいけないです。まだほとんど実施されていないです。それができたのは、2002年ですね。12年の間に満たさないといけないという、今途中なんですから、あと、今、今日、今年は2005年だから4年目かな。あと何年ぐらいで、どんな結果が出るかみんな面白がってます。見てると思います。

じゃあ、まずは最初の所なんですけど、これから米国の塾は増加しますでしょうか。これは公文の宣伝なんだけど、アメリカの公文がけっこう人気ですよ。

ということで、簡単ですが、アメリカの様子をちょっとお見せしました。すいません、どうもありがとうございました。

荻谷 どうもありがとうございました。それでは、ちょっと時間が長くなっておりま
すけれども、前半の発表の最後になりますが、佛教大学の原先生にお願いします。続
いてパワーポイントの準備をよろしくお願いします。

原 失礼します。佛教大学の原と申します。今日は学力の問題を中心にしまして、そ
の視点から見ました塾の話をさせていただきます。

佛教大学は京都にある大学ですので、この問題を考えるにあたって少しお話を申し
上

げたほうがいいことがあります。と申しますと、新聞なんかで、もしかしたら皆さん
ご存じかもしれませんが、京都の公立高校の中で、今いくつかの学校から先生方が選
び出されまして、その先生たちがいわゆるスーパーティーチャーと言いまして、塾あ
るいは予備校等でもう一度訓練を受け、そしてその中から先生方を選び出して、いわ
ゆる勉強を教えるのに好適な先生を選び出すという制度があ
ります。

京都だけではなくありませんで、関西の中には、大阪もこのような制度作りに走って
おりますし、宮崎県もそういう制度を採っております。明日、私これが終わりますと宮
崎に参りますが、こんなことを今、調べ始めました。そうすると、いくつ
か分かってくることがありましたので、今日はそれを少しまとめながら、塾の機能と
それからその功罪についてを、パワーポイントを使いながら少しお話
をしてみたいと思っております。

それから、余談ではありますが、見ていただくと分かりますが、私も実は小学生の
それも双子を持つ親の1人でございますので、親としての立場を少しこの中に付加さ
せながら、問題提起をさせていただこうと思っております。

皆さんのお手元にあるレジュメは荻谷先生たちが調べました通塾児童と非通塾児童
の差を前提としたグラフでありまして、これはこちらから少しパワーポイントで示す
と分かりやすいかもしれません。例えば、一番下の中学校の数学なんか注目してい
ただくと分かりますが、今から12年前の1989年の調査では、中学校の数学の通
塾者の平均点が75.8、それに対して、塾に行っていない子供たちの平均点が62.
5というふうに、これはあまりにも有名な表であります。この表のどこに注目する
かと、2点あるだろうと思います。一つは89年も2001年もそうですが、塾に行っ
ている子のほうが塾に行っていない子に比べて学力が高い。もう一つは、例えば一番

下の中学校の数学を見ていただくと分かる通りで、例えば89年の「中学校数学通塾者」、つまり一番左側の欄ですが、75.8ポイントが2001年の調査では74.5ポイント、1.3ポイントの下降だったんですね。ところが、その横の塾に行っていない子供たちの学力は62.5ポイントから54.5ポイントへと、8ポイントも下がっているわけです。

問題は塾に行っていない子供たちの学力のほう下がっているという問題、言い換えれば、塾に行っていれば何とか点数は取れるけれども、塾に行っていないと授業に付いていくことも難しいというふうに言われようになってきた点なんですね。

それと、われわれ教育をやっている人間たちは、いわゆる塾に行かない、行けない子たち、このデータをまとめたものがそうなのですが、塾に行っていないあるいは行けない子たちの学力、基礎学力をどう保障するかという視点が必要になってくるわけですが、今日は塾の問題に論点を絞ってお話をするわけですので、これについてはまたほかに譲りたいと思います。

さて、学力の視点から見た塾の機能とはいったい何かという問題について少し整理を致します。塾にはおよそ今までさまざまな方々がおっしゃっておりますが、四つぐらいの機能があるだろうと私は思っております、一つはこの学力分布、2こぶの学力分布のAの子たちに対する塾の機能です。これはご存じの通り進学を目的とした機能を持つ、いわゆる「進学塾」と言われているものであります。

そして、もう一方に学力低位の子供たちがおりますが、このBの子供たちを中心に構成されている塾がいわゆる補習機能を持った「補習塾」と言われているものであります。そして、三つ目が、これが最近非常に大きな問題になって参りましたが、不登校の子供たちを中心とした不登校層を集めている塾です。つまり彼らに対して学習機会を保障しなければならないという問題を論じる機能であります。

そして、もう一つの機能が実はありますが、それを整理する前にこのわれわれが目したの、実は私どもの研究室でこの塾の問題を研究しております、注目しているのが何かと申しますと、この「できる層」と言われていた、この進学目的のAの層の子供たちの中に実は二層化・二極化が進行しているのじゃないだろうかという問題なんです。つまり、Aの中にも2つの山ができる。つまり、A a層と言われる、俗に「進学エリート」とでもいうような、子供たちと、それからいわゆるそうでない、進

学塾の中にいながら学力がややその子たちより落ちる子供たちがいるというところがございます。

ポイントは、塾で学校の成績が上がらなくても、長期間塾に居続けるこのA b層の子供たちがなぜいるのかという問題がまず一つ目のわれわれのポイント、研究の関心でありました。「親が行け」と言っているのかということ、そうではないわけで、多くの子供たちは自分自身の意識として塾に行き続けることを選択しているわけですね。いわゆる塾をやめるということに躊躇しているのにはどういった原因があるのかということ調べて参りました。

すると、面白い言質が取れましたのは、「塾に行っていない子と一緒にされるのは嫌だ」という傾向が強いということであります。「塾に行っていない子と一緒にされたくない」、つまり学力が低位であるかどうかは別としまして、塾に行っていない子と自分たちは違うんだという意識を明確に持ちたいという意識が、どうやらA b層の子供たちを長期間塾にとどめる、そういうメカニズムがあるんだということが分かって参りました。

そして、先程申し上げました不登校の問題ですけれども、この問題につきましても、実は二つの不登校のタイプがある。つまり、いわゆるここにも二極化があるだろうというふうに考えております。要はこの背景に何があるのかということですが、不登校の子供たちが増えてきた一つの原因に、例えば今、教育政策の中で、高校の偏差値を序列化して偏差値下位の高校からその学校を統廃合していくという傾向があります。これは先行研究の中にいろいろありますが、定時制高校や偏差値下位の公立高校をつぶしてしまっていく傾向がある。そうすると、つぶされる対象になっている高校は、機能的に見ますと、不登校の子供たちの、いわゆる言葉はよくありませんが、「受け皿」のような機能を果たしているところがあったんですね。

ところが、そのタイプの高校がどんどん整理統廃合されて参りますのでその子供たちの行き場がなくなってしまった。その子供たちの多くが塾へ、学習の機会を求めて来ているんだということであります。これに、いわゆる「学習機会を保障する」という機能を付加させ三つ目の機能として定義します。

さて、四つ目なんですけれども、それは何かと申しますと、学校化する塾が出現してきたことであります。これは塾に通っている子供たちのどの辺りにその傾向が見られるかといいますと、パワーポイントの、ちょうど今、赤のグラデーションを入れた

辺りの所ですけれども、この辺りの学習塾を中心に、いわゆる塾と学校の機能が、お互いに住み分けがあまり明確でなくなっている塾が出始めたということでありませう。

具体的な例なんですけど、京都にあります、私が住んでおります所の近くの塾のチラシをもらって参りました。大事な所をフレームアップしますが、この塾の「教育方針」という所をちょっとご覧いただくと、上から三つ目、「広い視野、豊かな社会性」を子供たちに塾でつけるんだというわけですね。あるいは四つ目、「個性尊重の綿密な指導」をするんだという辺りの所であります。「個性」とか「社会性」という言葉はもっぱら塾にはこれまでなじみにくかった言葉だろうというふうに解釈しておりますが、この辺りを塾の方針として学生募集に使っている塾が出てきたということでもあります。

調べますと、例えばインターネットを使った通信型の塾が現れてきたりとか、塾と言いつつも「遊び」や「生活体験」、あるいは「自然体験」や「社会体験」を前提とした塾が出てきたり、あるいは最近では京都でも家庭教師のチラシによく入っていますが、「体育を教えます」という家庭教師があつたりします。こうなってくると、もう塾と学校がほとんど切り分けられなくなっている部分が出始めたということ。これをいわゆる四つ目の機能として整理したいと思っております。

さて、次に塾の功罪を調べて、整理してみます。塾のメリットは何かというと、まず一つ目によく挙げられるのが、いわゆる折り重なる領域を確認することができることです。つまり、これは図で説明致しますが、旧学習指導要領の時に、それぞれの教科における領域は、これもよく使われる図ですが、このように折り重なって学習指導要領というのには編まれていた。ところが、これが新学習指導要領になりますと、全く大事なところだけ、つまり木の幹の部分の所だけで構成されておりますので、重なり合いを確認することができないカリキュラム構成になっている。つまり塾は指導要領の改定によって、そぎ落とされてしまった部分を補っているんだということが言われます。

二つ目は、塾に通っている子供たちは、塾の時間を前提にして生活のリズムを作っているという指摘があります。例えば、これは先ごろ発表されたものですが、「学校に行く前に朝食を取っているかどうか」と、いわゆる学校での、例えばこの場合は中学校2年生の英語の学力なんですけど、その相関を取ったグラフであります。見るとわかります通り、「朝食を必ず取る」という子供の英語の学力が高いということがわかります。逆に「ほとんど取らない」子供たちになるに従って、学力が落ちているという指

摘ができます。

これはなぜかと言いますと、もちろん、例えば「朝、朝食を取ると脳に糖分が回って・・・」とかって説明があるのかも分かりませんが、そうではなくて、これをいわゆる生活のリズムと置き換える。あるいは、例えば荻谷さんらの指摘によればですね、「家庭的な影響が、学力やあるいは学習にいざなうモチベーションとなる」という研究がありますが、つまり、生活の習慣、家庭的な背景、リズムが実は子供たちの学力形成にいい影響を及ぼしているんだと解釈すれば、塾の時間に合わせて子供たちの生活リズムが構成されているということが成り立つわけですね。そうすると、生活のリズム作りに、塾は実は非常に役立っているという指摘もできるかもしれません。

更に、これは子供たちの所属集団の問題、つまりいじめなんかの研究をしているとよく分かるんですけども、学校にしか子供の居場所がない子よりも、学校以外に、例えば塾も含めてですが、居場所がある子供たちのほうが、つまり、自分の所属集団をたくさん持っている子供のほうがいじめられない、あるいはいじめに遭いにくいということが言われるのと同じで、いわゆる居場所として塾を求めている子供たちがいるんだということもメリットとして挙げられます。

反面、塾のデメリットは、先程申し上げました通り、塾に行っている子供たちの間の中にも、A、Bのように、いわゆる本当に進学を目的としている子供たちと、塾に行っているだけという子供たちがいるんだという、つまり二重構造を彼らの中に作ってしまったこと、これが一つ目であります。

これをですね、ちょっと最近、いい言葉がないかなと思って探したら、このロシアのマトリョーシカがよく似てるので、何かこれは使えるかなと思ってます。新しい造語を作るのが好きな人間が社会学にはいっぱいおりますので、(笑い) これをこれから使っていただければですね、ついでに括弧して「原によれば」と書いておいていただいて、「マトリョーシカ構造」とでも言おうかなと思うんですけども。

それから二つ目は、これは一般によく言われる受験偏重教育への結果としての加担がやはり塾にはあるということでございます。

実は、この発表をするにあたって、先程のマクドナルド先生がおっしゃってましたが、公文式がどうも随分注目されている。日本だけじゃなくて世界的に注目されているわけですので、いったい何がこれだけのシステムを拡大させていった背景にあるのかということありのままに教えてもらいました。これは固有名詞を出してもいいと、

担当者からも許可をもらっていますので、だいじょうぶだと思います。、それを私なりに解釈をして五つのメリットとして書きました。

順は不同なんですけれども、一つ目は、「一人一人の学力が違って当たり前」という視点からスタートすることです。学校教育にはこの視点が随分薄いように思うわけですね。

それから二つ目は、いわゆる「学力に対する関心が、得点よりも自分で学び取る力に置かれている」ということ。それは例えば、「子供の学習の面倒を見てやるのにすごくストレスを感じる」って言いますが、例えばこういうシステムだと勝手に自分で進んでいきます。そして進んでいきながら、結局だれにも教えてもらわなくても自らの学習力を高めていくという辺りが随分とこのシステムが受け入れられる要因であるということなのかと思います。

それから三つ目は学力のステップが、「分からない」ものを「分かる」ようにするというだけではなくて、「できる」という点に注目をし、更に、一番右なんですけれども、「すぐできる」という、時間の問題へ転換していくということです。つまり、下から二つ目ですが、学力を「点数」と「時間」の2要素で判断するという、つまり早く問題処理をするという辺りの所に力点が置かれているということでもあります。

それからもう一つメリットがあるとすれば、学習進度が非常に「スモールステップ」であること。ちょっとずつちょっとずつ進むことによって、子供たちは同じことを繰り返してのように感じながら先へ進んでいるということになるんです。

逆にデメリットは何かということですが、デメリットはいわゆる「なぜそうなるのかということを考える力を涵養する」という点に脆弱さがあるということです。補足をすれば、虫食い式で括弧を埋めていく作業というのは、子供たちの理解に基づいているというよりも、いわゆる解き方を覚えて解を導いているというかんじなのかもしれません。したがって、ちょっと問題をひねられるとそれに対してたちまち対応できなくなってしまう。それから、早期教育や受験偏重の教育へ、結果として加担しているという問題も指摘されるところです。

最後に、これが学校教育との一番の違いでしょうけれども、どういう人物を育てようとしているのか不明確であること。この点がデメリットだろうというふうに言われます。

最後に、子を持つ親として私のポイントを四つ指摘させていただきまして、私のプレゼンを終わらせていただきます。

先程申し上げました通り、私も親の立場から塾を見ている部分も実はあります。こういう席ですので率直に申し上げますが、正直申し上げて公立学校に対する不信感というのはどうもぬぐえない部分があります。それは、それではいけないと分かっているながらも学校教育では必ずしも学力が保障されるとは思わない、思えないという親の本音がどこかに見え隠れ致します。いわゆる「小学校1年生の段階からそんなに差を付けられてしまったら、あとで取り返すのがきつい」という辺りのところがどうやら親の本音としてあります。

それから二つ目は、結局「塾には行かせるないといけないだろうなあ」というのをみんな持ってるのではないのでしょうか。一部の親は別ですけれども。あとは、「いつから行かせるのか」という問題と、「どんな塾に行かせるのか」というタイミングの問題。そして三つ目は、どういう言葉がいいのか分かりかねたので荒い言葉を使いましたが、いわゆる「抜け駆け志向」とでも言いましょうか、「自分の子供には勉強ができるようになってほしい」という親の願いがある。今のままではどうなってしまうかという、この二つ目、三つ目を合わせますと、いわゆる「アンテナの高い親」、あるいは「その子」のみがチャンスを得ることができるような構造になっていると言えるかもしれません。つまり、言い方を変えれば、例えば「ただとにかく塾に行かせればいいんだ」というふうに考えている親がいる一方で、「この塾でなければならぬ」とか、あるいは「学力や受験情報を得るには、この塾だ」というふうに特化して、もう1点狙いで行かせている親たちまでいるわけで、つまり、繰り返しますが、親のアンテナの高さによって子供にどういうチャンスを与えることができるのかは、随分塾の種類によっても変わって参ります。

そして、一番最後ですが、私が住まいします京都であるとか、あとで総括討論をしていただきます山内先生のお住まいになっている神戸などは、いわゆる東京とよく似た傾向があるかも知れませんが、私学志向が実に強い地域であります。従って、公立と私立には随分と差があり、背景には、「私学はたくさんいろんなことを教えてくれる」というイメージがどうやら親にはございます。何も、いわゆるエリート志向でなくとも、みすみす公立学校に行かせてあとで苦労させるよりは、あとで自分の子供に苦労させるのは嫌だから、ちょっと、早くから私立に行かせて、といった感じなのかもしれません。この辺りの親の意識みたいなもの、あるいは本音みたいなものの後ろに、先程から申し上げてきた塾がダブっているというのが今の社会の構造ではないだろうか、というふうに思っております。

限られた時間でございますので、一応、私のほうからの問題提起はこのぐらいにしておきます。どうもありがとうございました。

荻谷 ありがとうございました。こちらで当初予定した時間を10分ほどオーバーしてるんですが。もうこのまま、少し休み時間を減らして進めております。当初の予定ですと、45分再開だったのですが、もう、ちょうど3時再開にしますので、10分間ここで休憩を挟みまして、そのあとお二人の指定討論者の方にそれぞれ、できればちょっと15分を少し短めにさせていただいて、コメントをいただいて、あとなるべくフロアの方とディスカッションできる時間を1時間ぐらいは最低取りたいと思います。その関係上、当初は4時までを予定しておりましたが、4時半まではかかるというご覚悟で、(笑い) 10分間の休憩を取っていただければと思います。それでは10分間の休憩をしましょう。

(休憩)

荻谷 それではまもなく始めたいと思いますので、再度ご着席をお願い致します。こちらの進行の不手際もありまして、十分な時間を取って先生方にご発表いただけないんですが、このあとお二人の指定討論者の方から、それぞれ当初は15分と予定してたんですが、多少短めにお願いしまして、そしてそのお二人のコメントが終わったあとで、今度はフロアの方含めて全体の討議に移りたいと思います。

それでは初めにコメンテーターとして、鹿毛先生をお願い致します。どうぞよろしくお願い致します。

鹿毛 皆さん、こんにちは。慶應義塾大学の鹿毛です。今日は、先生方のお話伺いまして、私なりに考えたことを最初にちょっと簡単に述べさせていただいて、各先生方に質問を投げ掛けてみたいと思います。

「今日指定討論をやれ」というふうに仰せつかってから、塾と学校の関係っていうことがずっと頭の片隅にあって、自分の塾体験から「いったい塾って何なのかな」っていうことを振り返ってみますと、確かに学習塾に中学の時とか通ってましたしね。高校の時とかは予備校には行かなかったんですけども、大学に入って、あるいは大学院の時とか、塾の講師とかあるいは経営者まがいのことまでしてたんですよ。これらの経験も踏まえながら、改めてこのテーマについて考えて参りました。

二つ、問いのようなものが浮かんでいます。一つは塾と学校っていうのは、同じなのか、違うのかっていうこと。もう一つは、塾的なものと学校的なものっていったい何だろうかっていうこと。この二つについてちょっと私なりの考え方を申し上げたいので、先生方に質問のボールを投げてみたいと思います。

まず、これらのことを考えるにあたって、小宮山さんという方が岩波から「塾」という本を、「シリーズ教育の挑戦」いう中の一冊として書かれています。塾って一言で言ってもいろんな塾があるんですよ。それを一括りにして「塾」とまとめてしまうってこと自体がちょっと無理があるんじゃないかなと。その小宮山さんは、学習塾を進学塾、補習塾、総合塾、教育理念塾の四つに分類しているんですね。

塾というと主に進学塾のことばかり光が当たるようなんだけど、むしろ数としては補習塾みたいなところは多いし、総合塾ってのは進学塾と補習塾を合わせたようなもので、むしろ個人的ではなくて会社経営というか、資本力があるような規模の大きなものが総合塾だと位置づけられています。

教育理念塾っていうのは、今日の話題であまり出なかったんですけども、原先生が最後にちょっとお話しになったことと関連するかもしれませんが、塾長さんが理念を持って、それを実践するというかたちの塾であります。

私も間接的にかかわりがある塾が品川にありまして、そこはまさにそれでして。何でしょうかね、それこそ個性とか社会性って言葉は使わないかもしれないけども、みんなで合宿をしたり、その中で何か出し物を決めるみたいなことをグループごとにやってるんだけど、その中でいろんなドラマが起こるわけですよ。ドラマを通して、それをサポートしながら人間形成っていうんですかね、一言で言うと。そういうものをすごく大事にしながら、補習塾もやるというね。そういう理念がすごくきちっとあるような塾があるわけです。そうしますと、塾といってもいろいろあるんだなっていうことをまず踏まえなければいけないということが一つですね。

ただし塾というのは、「経営」であるということ。これはやっぱり押さえておかなければいけないですね。学校も経営といえば経営なんですけども、要するに税金の納め方とどういふふうに直結しているのかっていう仕組みが、つまりお金の流れが違うっていうことと、あとでちょっと述べますけれども、サービス業的な意味合いがとても強いかなということなんです。

要するに教育理念と経営理念とどういうふうに折り合いを付けていくのかということが、塾では厳しく問われることになると思うんですね。多くの場合、教育理念塾を除き経営理念のところ優先されると、学校の学習を補完する補習塾、あるいは進学ということを目的として、そこを勝ち抜くための受験知みたいなものを教え込むという消費者のニーズに応じた経営が優先されることに伴っているようなことが起こってくるという点は確認しておく必要があると思います。

では、「塾的なもの」と「学校的なもの」とは何かという話をちょっとしたいと思うんですけども、塾的なものっていうのは、今日の先生方の話でも分かるんですけども、ある種の教育の内容とか方法というものが、非常に効率化するというか、教育心理学的に言いますと……。私は教育心理学者ですので、どちらかというところ子供の学習であるとか、発達であるっていうことから教育を見ていきます。ですので、こういうような塾とか学校的なものということ考察する枠組みもそのような視点から見ていくんですね。

ディープアプローチ、サーフィスアプローチという区別があります。ディープというのは深い学習、サーフィスというのは、要するに表面的なというか浅い学習という、学習の二つの区分というのがされています。

浅い学習というのは、要するに機械的な記憶であるとか、ハウツーの知識をすぐに問題場面に適応して解決していくようなやり方を非常に重視するような方向性であるのに対して、ディープアプローチというのは、もっと意味であるとか、意味づけとかいうこと、あるいは意欲ですよね。もっと知りたいという好奇心であるとか、そういうものを元にして理解が深まるようなアプローチということなんです。

一般論ですけども、学習を深めていくという観点からするとディープアプローチが望ましいだろうということがいわれています。認知心理学的に言いますと、理解とは、知識と知識が結びついてネットワークを広げていくということですから、「分かった」とか「できた」ということは、問いを発しながら、それを解決していくプロセスの中でそのようなネットワークが豊かになることだということになります。

いわゆる10年ぐらい前に強調された新学力観モデルで言いますと、要するに「考える力」であるとか「知識・理解」とか「意欲」とか「判断する力」とか、「自己評価能力」とかがすべて一体化したような学びが起こったとするならば、それはディープ

アプローチだと思います。

こういうふうを考えますと、塾的なものというのは、どちらかというと表面的な浅い学習、これは佐伯胖先生が書かれてる予備校についての本の中で「受験勉強っていうのは、やり方主義である」というふうに断言されてるんですが。要するにやり方主義っていうことになると、とりあえずテスト、客観テストがクリアできればいいわけで、それ以上の勉強は無駄ということになるんですね、ある意味で効率重視になります。そうするとサーフィスアプローチのほうがよっぽどいいわけで。そのやり方を効率的に教えるということが主流になってくるのは必然だと思うんです。

そのやり方主義の問題点として、それこそ跡見の藤澤伸介先生が「ごまかし勉強」という本を書かれてますけども、要するにその場しのぎの学力をつければいいわけで、そのような学習っていうのは無味乾燥で面白くないけども、とりあえずやんなきゃいけないと。そういうふうに身についた学力というのは、いわゆる「学力の剥落現象」といいますが、テストの当日だけ光り輝いていけばいいわけですね、しかし、その学力の輝きはそもそもメッキですから剥がれ落ちてしまうわけです。浅いアプローチというのは、そういう弱点を持っているわけです。

それに対しまして、例えば教育理念塾っていうのはいろいろなので、これを塾全体がそうだというふうに一般化はできませんけれども、ただ、そのようなかたちだとするならば、学校的なものというのは、恐らく理想的には、ディープアプローチみたいなものを目指しているということだけではなくて、これは先程ちらちらとどなたかおっしゃってましたけれども、特に佐藤先生がおっしゃってましたでしょうか。人間形成という側面を色濃く持っている。これはとりわけ日本の学校の場合、強いんじゃないかと思うんです。

これはどういうことかという、要するに学校は一種の生活の場でありまして、その生活を前提として固有名詞を持った一人一人の子供たちがいるわけです。そしてそこに固有名詞としての教師がいて、そこでの人間関係であるとか教師の子供の見取りであるとか、そのようなものを基盤として授業が立ち上がってくるものが、理想論的にいい授業であるというようなイメージが持たれています。

要するに、学校の教師はただ教科を教えるプロではないんです。その背後には人間理解とか子供理解とかいうことを基盤として授業があるから、授業と授業外の活動を切り離すことができないんですね。

ですから、学校的なるものというのは、ある意味であいまいなんだけれども、子供たちを丸ごと学校生活の中で育てるという教育活動の一環として授業の一コマがあるというとらえ方をします。ここに私は学校的なものを感じます。

そうしますと、学校的なもの塾的なものというのは、実はある意味では学習のとらえ方と、その背後にある考え方が随分違うんじゃないかな。「学校はサービス業か？」という問いを、私はとても大事な問いだと考えていますが、私自身の個人的な考えでは、そうじゃないと思ってるんですけども。ただ塾は、どうしてもさっきの経営というでもありますので、端的にいうとサービス業であるということになりますよね。

さっき原先生からは、いろいろ個性とか社会性とか学校の専売特許だったものを塾が掲げて宣伝するっていうことがあるというお話があったけども、例えば今までは、学校はデパートのようなもので個性も社会性も学力も、生活指導から部活動まで何かから何まで、デパートのようなサービス業であるのに対して、塾は専門店のようなサービス業だったというとらえ方もあるかもしれないけれども、私はそういうとらえ方ではなく、むしろサービス業かサービス業じゃないのかっていう問いがとても大事だろうと思う。

それはどういうことかという、サービス業じゃない要素というのは、学校には「共に創っていく」という発想があるんじゃないか。それは例えば授業でいえば、教師と子供と一緒に創っていくんですね。あるいは学校と地域が共に創っていく学校であるという視点が入ると、実は「サービスする一される」という関係ではないんですね。これが非常にクリティカルな学校と塾の違いであるんじゃないかと思います。

ただ、塾と学校の同じところは何かっていったときに、教育理念塾に対して特に感じるんですけど、実は子供に成立する学びという観点からすると、学校であれ塾であれ、「よい学び」は存在するんじゃないかっていうのも事実だと思います。制度的な制約はいろいろあるけれども、要は授業の中で子供たちがその一授業をどういうふうに体験するかというところで、例えばディープアプローチが成立したりする瞬間っていうのは、塾であろうと学校であろうとありえるし、学校であっても多くの場合それが起こっていないわけですね。「学校が塾化してる場合もあれば」という話もありました。だから、それは塾か学校かという問いは、実は本質的じゃないということも分かってきます。

私なりのこの問題に対する整理を述べてきましたけど、余談でちょっと付け加えるならば、河合塾の丹羽さんと言う人が、「間違いだらけの大学入試」という面白い本を書かれているのですが、その本の後半で何が論じられてるかというところ、河合塾の戦略として、例えばサテライト方式であるとかテクノロジーを導入して授業改善を図ってくんですけども、そこで分かってきたこと二つあるというんですね。一つは、高校生の根元の学力が低下してるという事実。つまり根元の学力っていうのは、昔の公立進学校で培われてきたような、要するに学ぶ意義であるとか、これまでは高校時代に何となく感じ取ってきて予備校に入ってきたから、やり方主義でも通用していたっていうんですね。ところが、そういうことが最近成立しなくなって困っているというのが一つ。

もう一つは、根元の学力を着けさせなければ予備校が立ち行かないから、授業研究を始めたっていうんですね。そのためには要するにサテライト方式じゃ駄目で、学習者と教師が一緒の場を共有してこそ授業なんだっていうことが研究の結果分かっていうんですね。これは、非常に本質的なことで、予備校だからとか学校だからっていう問題を越えて、実は「学ぶ本質って何なのかな」といっていったときには、原理は一つなんじゃないかなって思ったりします。

さて、そこで、今は私なりの考え方をいくつか述べてきましたけども、一人ずつちょっと質問をボールとして投げたいと思います。

まず、倉井先生でしたっけ？

倉井 はい、そうです。

鹿毛 倉井先生ご自身の塾経営の理念というんですか。恐らく先程の教育理念型というものは、非常に私は注目したい塾の在り方なんですけども、そのときに先生ご自身の言葉で、そのような理念がどういうところにあるのかっていうのを、むしろここで主張していただきたいなど。ポイントを絞ってお伝えいただければと思います。

それから、佐藤先生。先生が最後におっしゃった「塾に頼らない学校作り」という言葉、非常に印象的でした。それはよく分かるし、私も先生方と一緒に、学校の先生方と一緒に仕事することがとても多いので、ほとんどその通りと思って聞いてたんですけども。

ただ、今日のこのシンポジウムのテーマである塾との関係というところで、もう一歩踏み込んだパートナーシップの可能性っていうんですかね。もしかしたら広い意味での人間形成を共にシェアしながら、塾とのパートナーシップを築くこともあり得るわけですが。

一方で原先生からご指摘あったように、「学校化する塾」っていうのも出てきている状況ですね。奇しくも今日は、「学校化する塾」と「塾化する学校」という二つが出てきましたけれども、塾が学校化してくる中で、どのような今後のパートナーシップっていうのに、文科省のほうもかなりかじを切ったところでもありますので、学校がいつまでも「私たちは学校です」というふうに言ってる時代ではないようにも思いますので、ですから、そこいら辺のご意見をもう少しお聞きしたいなというふうに思います。

さて、それから車先生については、同じ、先程の先生と同じなんですけど、上智学院のお話がなかなか聞けなかったと思うんですね。ですので、いわゆる公立学校と違うところで、特に先生は特殊な学校の必要性ということをかなり強調されたと思うんですね。上智学院の教育理念の辺りをもう少しお話しただけたらなと思います。

それから、マクドナルド先生のお話も非常に興味深かったんですが、「アメリカには塾がない」と言いながら、実は「塾的なもの」っていうのはあるんだなっていうのが分かったんですね。それは、例えば私もアメリカに2年ぐらいいたのでよく分かりますが、要するに標準化テストで、ある小学校の先生が「標準化テストに反対。なぜか」というと、私は標準化テストの訓練する仕事をしてるわけじゃない。けどもしなきゃいけない。それを私は授業と呼びたくない」と言うんです。彼女が言っていました。

ですから、それはある意味では表面的な学習っていうか、実はディープ、深い学習を期待してるのにもかかわらず、浅い学習をせざるを得ないっていうようなジレンマに陥ってる場所であるとか、あるいはサマースクールであるとか、サマーキャンプなんかも実は教育理念的な塾といえば塾なわけで。一番分かりやすいのは、SATの受験コースですけど、それは進学塾に近いのかもしれない。ですから、塾という形態、そういうようにひとくくりはされないけれども、「塾的なもの」っていうのはあるんじゃないかなというふうに思うんですね。

ですから、アメリカの「塾的なもの」っていうのをちょっと語っていただきたいなということなんですけど、それじゃちょっと漠然としてるかもしれないので、公文がな

ぜ人気なのかなっていう辺りですね。私は公文っていうのは、さっき改めて確認したのですが、あれはプログラム学習の原理以外に何があるんだろうっていうふうにも思うわけで。

プログラム学習は、だからいいんですよ。ある非常に特殊な領域に対する非常に効率的な学習だし、確かに学習意欲をそれで育てることもあるでしょうから、私は否定するつもりは全くありませんけれども、ただ、プログラム学習の限界だってあるわけですから。だからそこら辺の辺りをとりわけ公文がなぜ人気なのかというのを、ぜひアメリカ人の先生の口から、語っていただければなというふうに思います。

最後に原先生ですけれども、先生の親としての本音というところを、非常に興味深く伺ったんですけれども、私も同じく小学校の娘がいる身なんですけれども、先程のサービス業ということに関して、私はどちらかというところやっぱり学校の先生たちと仕事することが多くて、そっち寄りの人間関係が多いからかもしれないんですが、公立学校の肩を持ってしまうというふうに、どちらかというと思ってしまったり、公立の先生たちに優れた先生たちたくさんいらっしゃるがよく知ってるので、意外と信頼してたりもするんですね。

恐らく、学校がサービス業かどうかという大きな問いがあるんですけれども、そのあたりと絡めて、何かコメントをぜひ。私は教育心理学者ですけれども、先生は社会学者のお立場ということなので、同業といえば同業なんだけど、ちょっとスタンスの違うところで、先生の本音の辺りと絡めながら、ぜひ語っていただけたらと思います。

すみません、ちょっと、かなり長くなりました。すみません。

苅谷 アキタさんの予言通り。(笑い) それでは続いて山内先生にコメントをお願いします。

山内 神戸大学の山内でございます。早く終わったほうがよろしいようですので、要領よくやっていきたいと思っております。

40年ぐらい前の統計を見ますと、首都圏で大体10人に7人ぐらいの子供が、塾に、何らかのかたちで塾に行っていたというデータが残っております。関西圏でも似

たような傾向だったと思ういます。私が子どもだったころといいますと、「未塾児」というような言葉がありまして、塾に行っていない子どもは、「未塾児、未塾児」と呼ばれていました。いじめられるというわけではありませんが、もうすでに塾に行っていない子どもが珍しくなっていた環境だったわけです。

私個人の経歴を振り返りますと、幼稚園と小学校は公立で、中・高は先程原先生のお話にもございましたが、私立の6年一貫校で、大学と大学院は国立でございます。しかもずっと関西圏で住んでおりましたので、それ以外の地域のことはよく分かりません。ただ、私がゼミで塾の問題などを議論しますと、山陰とか北陸とかから来た学生は、「私の住んでいた町には、塾とかありませんでした。だから、そういう選択肢はあり得ませんでした」ということを言う生徒がよくおります。

ですから、さっき佐藤先生が「学校の塾化」ということをおっしゃいまして、原先生は「塾の学校化」と逆のことをおっしゃったわけですが、塾と学校とがお互いの存在を前提として、あるいはお互いがあるものとして、これから存在していく以外の選択肢はないというのは都市部での話ではないかと考えます。従来のように、塾が本来の学校教育の在り方をゆがめるとか、あるいは学校はきれいな建前ばかりいってしっかり学力をつけないとか、そういう対立の構造からお互いに何か前提として、あるものとして成り立っているように見えるのは、首都圏や関西圏、中京圏の話であります。塾の存在は、地域分布上、非常に偏っているというイメージを持っております。この地域間格差をいったいどうするのか（あるいは何もする必要はないのか）ということが、非常に気になりました。

それから、これも佐藤先生からご指摘のあったことですが、階層という問題は、やはり塾について考えるときに見落とすことのできない要因であると考えます。社会学者というのは一私も教育社会学を専攻しておりますけれども一何かといえば社会階層、社会階層と言って、教育学の人々に眉をひそめられる機会が多いわけですが、この問題はどうしても看過できないと考えます。と申しますのは、大阪市や大阪府の学力調査をみますと、いろいろな要因を考慮して、子供たちの学力を回帰分析に掛けて説明しているのですが、一番規定力の大きい要因は、ただ単に「塾に行っているか行っていないか」という要因ではなくて、「週当たり何日塾に行っているか」という要因でした。週4日塾に行っている子供、3日行っている子供、2日行っている子供、1日だけ行っている子供、全く行っていない子供と、この順に学力がリニアに下がっていくというわけです。

そうだとすると、当然週当たりの塾に行く日数が多い子供は、塾に行く費用も当然かかるわけでございまして、それはまさに家庭の経済力の問題になってくるというわけでございます。ですから、階層という問題をどう考えるかということは看過できません。原先生も少しお触れになっておりましたが、触れさせていただきます。

最後に私のほうから申し上げたいのは、関西圏の話でございます。関西では長い間、有名大学に進学しようとする子供には、二つのルートがありました。一つは私立6年一貫校に公立小学校から入って、中学受験を経て、高校受験なしで有名大学を目指すというコースです。

先程原先生のお話にもございましたように、京都と神戸で私学志向は大変強いように思います。ただし、大阪や神戸では、非常に公立学校の足腰がしっかりしております。例えば、東京大学ですと2004年度の合格者数の多い上位20校は、私立17、国立3でございますが、京都大学の場合には、私立12、公立7、国立1です。それから大阪大学は、公立11、私立9です。公立が非常にしっかりしております、特に大阪は非常にしっかりしております。

ですから公立学校に行き、1年生からあるいは2年生の後半ぐらいクラブをやめるころから、予備校の専科に行くとか、あるいは塾に行くとかたちで有名大学を目指すというコースもあったわけです。

ところが、最近どんどんどん塾に行く年齢が低年齢化し、多様化し、長期化している。私立に行った子供は、学校でもう十分なことやっているから塾に行かないというのがこれまでのパターンだったわけですが、最近は私立に行ってもずっと塾に行っているようです。小学校の時からずっと塾に行っているわけですね。大学に入ったら大学に入っただ、またダブル・スクールやっております。非常に長いお付き合いになっています。他方、公立の人たちは中学校を受験するわけではないのに、もう小学校の低学年からずっと塾行っております。さらに、その傾向に拍車を掛けるだろうと予測されるのが、ご案内と思いますが、同志社ですとか立命館の小学校設置です。それに関西大学、関西学院大学といった大学が追随するということがほとんど決まっております。この4大学が動きますと、その流れに続こうとする大学も当然出てくるわけです。ですから、関西では、塾ですとか、お稽古事ですとかの多様化、低年齢化、長期化という傾向は、ますます進むだろうと考えます。

今日お話のあった中で、一つ時間の関係で恐らく省略されたのだと思いますが、関西における場合、お稽古事が非常に重要です。お稽古事は、塾とは別のものというこ

とではございません。低年齢化するに従ってどんな塾でもお稽古事的な要素が入ってきますし、それから人間形成的な要素も強まってくるわけです。「就塾前教育」というかたちで、お稽古事が一公文式でもそうですけれども一関西で非常に受け入れられていると考えます。

また、公立の小学校で入るなり、一年から学級崩壊というような学校も少なくございませんから、そういった学校に通わせている親は、学校の教育には期待できず、したがって塾で補うという以外に選択肢はないわけです。学習する習慣を身に着けるとか、学習する姿勢を身に着けるといった目的も持って塾に行かせるということになるわけです。要するに、先程原先生が不登校の児童に関しておっしゃった「学習機会の保障」というようなことにもつながっているとみております。随分はしよりましたけれども、これで終わらせていただきます。

苅谷 どうもありがとうございました。それでこれから議論に入りますが、皆様からご質問を受ける前に、今鹿毛先生のほうから、それぞれの前半の発表者のお一人お一人に質問が出てましたので、そして今の山内先生のコメントも踏まえまして、まず簡単にそれぞれ前半の登壇者の方に、手短にまずプライをさせていただいて、そのあとで今度フロアとのディスカッションに移りたいと思います。

それじゃ、なるべく短い時間でよろしくお願い致します。

倉井 先程の話なんですが、河合のサテライトの授業のお話ですが、サテライトのお話なんですが、名古屋にあります、私立の中・高・大学の付属高校でサテライトの授業をやるということになったんです。たまたまうちの塾生もその高校へ行きまして、「先生、塾へ来なくてもよくなった」と。それはなぜかという、河合でサテライトというのを始めたということで、それから満員御礼状態だというふうで、「僕もしばらくしたらやめますよ」という話だったんです。

ところがふたを開けてみたら、実際続いたのは1カ月ももたなくて、20日ぐらいで、あと閑古鳥状態ということでだれも来なくなってしまうのもう大失敗だということがありましたから、この丹羽先生のおっしゃられるのは、僕は正解だと思うんです、この点に関しましては。

それから、私の塾が何を指すのかということ、こういうご質問だったと思うんですが、今の決して、サーフィス学習とディープ学習、これでよろしいですか。僕はど

ちらを採るかといえば、やっぱりディープなほうでしょうね。このディープだといっても一つ前提条件がありまして、基礎部分を徹底的にまず固めると。固めなくてはディープな方向へは進めませんので、僕はまず基礎部分は固めます。それから、今塾で一番少ないのは、筆記体を教える塾というのは、今は皆目状態です。うちでは高校から入ってくる人たち、非常にご苦労だと思うんですが、一応筆記体も覚えていただく。そこから始めます。

それで僕はこういう方向に行ったほうがいいのではないかなと思ったのは、ある本によります。マックス・ウーバーの「職業としての学問」という本の中に「写本の文字の解釈をこのままにしておいてよいのか」という状態で、ずっとこだわり続けると、三昧の境地に入って、あるときに靈感がわく」と。何という面白いこと言ってんだらうと感激しました。

それから僕自身がかかなり落ちこぼれたという経験がありますので、自分がそこから立ち直る時にどんな学習法をしたかという、今の学校の進度に合わせるのをやめて、自分で辞書、参考書を先生にお聞きして、それからです。それから何とか立ち直ることができましたし、現在でも、ぼくはどちらかという英語専門なんですが、その専門の部分については、かなり実際に教科書とかそういうものには表れてない部分で、「こういうふうに解釈できるんじゃないか」と、そういうところもかなりの部分で答えができるようになりましたし、それから生徒諸君に伝える場合でも、こういうねたもできるというのも進んできましたと。

それで塾へ入ってきて、最初はほかの塾から替えられてうちへ来る子供さんの中には、最初に大きな拒否を起こす場合があります。それはなぜかといいますと、「人称代名詞、もう前回のテストで終わったんじゃないか」と。終わったやつを僕はまた1週間ぐらいたってからやるんですよ。「だから私はあの時に合格したんだ。もうできる。もうやらなくていい」、言うのがけっこう多い。でももう一度やっていただきます。

そういうことをやりますと、例えば3のものが10にはならないけれども、かつて3だったものが5になるという、次に7になり、さらに次に10になるという、こういうことはじゅうぶんになり得ると。それをマスターした段階で、今度は深い部分に入っていくというやり方が一番いいのであろうし、生涯学習につながるこれ以外の方法はないと思っています。

それから、学習習慣なんかは、塾によって左右されるのではなくて、生活習慣の正しい子供さんが塾へ入ってきたりすると、やっぱり伸びます。ところが、生活習慣が悪くて、朝はなかなか起きられない、夜更かし。それからゲームをやり続けると。こういう子供さんが入ってきてもなかなか伸びませんので、家庭での生活習慣が非常に大切だと思います。

それから社会階層の問題でいっても、例えば僕は学生の時アルバイトで個人指導したことがあるんですが、名古屋でいうと東区白壁町と言う所で、徳川時代には名古屋城へ勤めているいわゆる重職の方々が住んでいました。それとかあとは主税町（カコマチ）という地区も親からずっと引き継いでという所なんですけど、彼らには彼らなりの厳しさがあると思います。

それは時代を経た厳しさであって、たまたま運良くなったものではないので。家庭としてのそういう理念がちゃんとできあがってます。だから何のために学習するのかということ、説明する必要はないんです。だから最初から受け入れ態勢十分であるし、予習まで済ませてありました。

ところがそうではない家庭で、つい最近かなりのお金を得られて、豪華な生活をしておられるという家庭の子供さんの場合は、生活習慣の改善からやらないと全く駄目だなというのはありました。以上です。よろしいですか。

荻谷 はい。じゃ、はい。

佐藤 私のほうは、塾に頼らない学校ということで質問されたわけですけども、最初にお話をしたように、私の気持ちの中には、塾がいいとか悪いとかいうことはどうでもいいという考え方ありますので、塾ということを前提に学校経営をしてきてこなかったということです。

学校というのは、塾は塾として存在してもいいと思います。ただも学校としてやるべきことは、学校としてって何をやるかっていうことをきちっとやっていくという、そういう考え方をもっているわけです。

でも、塾は存在するわけですから、今パートナーシップの話をされましたけど、学校でやるべきことと塾でやるべきこと。補習塾はあっていいなと思っております。学校の中で、本当はこの子にもっと時間をかけてあげたいとは思っていても、なかなか

時間が取れない。そのために補習塾で補ってもらえるということは、助かるなというふうに思います。

実は塾の経営者と自分が小学校校長の時に話し合いをしたことがあります。地域の学習塾をやっている。半分来てくれましたが、進学塾という所は、まずほとんど来ません。家庭塾というんですかね、低学力層の子とか近所の子どもたちが行くような所は、学校の考え方と似てるわけですね。

そういうかたちのものもパートナーシップっていうんでしょうかね、「この子は学校でこうなんだけど」、お互いが分かり合えるということがあります。そういう関係ありますけれども。全部の塾とそうやって、例えば塾長さんと会って「あそこの塾はいいから、お前この塾へ行け」なんて言ったら、これまた学校が変なことをしてることになりますので、それはできないと思うんです。

「もし、こういうことができたらな」と今ふと思ったのは、やはり学校の先生方は大変忙しい。多忙なんですね。授業やるのにやっぱり教材の、自作、カリキュラム開発ということです。これ、非常に時間がかかるわけです。塾の先生のほうが、そういう点では教えることだけに専念できるわけです。学校はそれ以外のこと、生活指導、部活動指導等やっておりますから、なかなか取れない。だとすれば、いい教材開発をしてくれたものをいただけるというような、ちょっと何か身勝手ですけども、そういうものをいただけると。

私は実は本屋さんへ行くと必ず予備校の、有名〇〇講師とかありますね、その先生がどんな教材でどういうふうに使われているのか、必ず見てくるんです。そうするとやっぱり教材なんだなということは分かります。やっぱり学校の先生方は、もし時間があって、ほんとに毎日、午前中授業があって午後空いているというようなことあれば、そういう時間に充てられるわけです。

充てられないわけですので、できればカリキュラム開発したものをいただけるというようなシステムがあるといいと思います。学校で与えるものは少ないかもしれませんが、お互いにいいものは交換したいと思っています。

荻谷 それでは、車先生。

車 まず上智学院っていうのは、特殊な目的を持った塾であることを申し上げ

げたいと思います。私たちの塾に通う子供たちは、毎日特殊な環境に置かれていて、子供たちの環境が日本への企業の駐在員だとか在日韓国人っていう、そういう特殊な環境の子供たちが多いです。そして、その子供たちが通う学校というのは、日本の現地校と、あと韓国人学校、そしてインターナショナルスクールの三つの学校に通う子供たちが来ています。

このようないろんなさまざまな状況を背負っている子供たちなので、成績やそういう部分においても、千差万別、すごくさまざまな子供たちがいます。このような適応問題などを、さまざまな問題を抱えている子供たちへのケアが、学校だけでは十分ではなく、私たちの塾でそのような部分のケアもしています。

あと、そうですね。まず在日韓国人の場合、母国の知識が足りないわけでありまして、そのような部分で教えてる部分が多くて、駐在員の子女の場合は、また韓国のように戻って、勉強したり受験されたりする子供たちなので、そのような部分でのサポートをしております。このような子供たちへの個別なそのニーズを、学校側から提供されることを期待することは難しいので、そのような役割を私たちどもがしております。

塾の教育理念なんですけれども、私は知識よりは子供たちが知恵を持つことを願っております。子供っていうのは、子供らしさが大事であると考えております。子供一人一人の潜在力と、また理念を持つようにしてあげるのが大事だと思っております。子供たちが正直であることを願っています。特に日本で生活している子供たちなので、日本の誠実さを学ぶことを願っています。韓国にやがて戻っていく子供たちにも、これらを学んでほしいと思っています。

そして、一つのものごとをさまざまな角度から見ることができる融通性を持つことを願っています。小さいものでも敏感にとらえることができる子供に育てたいと思っております。

東京大学で、塾との関係を考えるこのような機会をとともうれしく思っております。以上です。

荻谷 じゃ、続いて。

マクドナルド 三つの疑問や質問を聞かれたんですけれども。まずは、学力試験です

けども、3年生から始まるわけだから、やっぱり全然今まではなかったことなんだから、嫌われることが当たり前。けっこう緊張したり、子供の学力高めないといけないから、やっぱり自由がなくなったり、ゆとりの反対側に行ってしまう、その傾向が出てきたから、アメリカの先生方、今けっこう混乱しております。

まずは、2番目のサマースクールとかサマーキャンプということが塾みたいなものです。それはその通りだと思います。だから進学的ではなくて、補習的な塾ということ言えると思いますが、やっぱり似たものと、その通りで。

では、三つは何で公文が人気ということ。効果的です。実は特に数学の場合、やっぱり弱い所があると思うんですけど、OECDの世界的な学力テストがアメリカも落ちってしまうところがあると思うので、そのころが、やっぱり親が数学的な学力を高めないといけないと思いながら、そういう公文みたいな塾に行かせることになっております。以上です。

荻谷 続いて原先生、お願いします。

原 すみません。ご質問は、私が最後のところで公立学校に対する不信感をお話し申し上げましたが、それに対して公立学校もいい所はないかというお尋ねなのだろうと思うんですが。

時間の関係であまりゆっくりしゃべれませんでした。もう少し本音のところでも申し上げますと、公立学校にももちろんいい学校はあるんですね。京都にもいわゆる「いい学校」と言われる小学校、中学校があるわけです。ところが校区っていうのがやっぱりございますので、その校区に自分が居住していなければもちろん通えないわけです。

京都にも、よく新聞やニュース、テレビなどでも取り上げられる学校がございますが、その学校の校区にわざわざマンションを買って、そこへ親子が移り住んでという、そういうことをやっているのは一般的なんですね。「そこまでしなくても、私学へ行けばいいじゃない」というのが正確なところなんだろうと思っております。

荻谷先生がお書きになった「学力の社会学」の本の中の最後の所で、大阪大学の志水先生がお書きになっていたいわゆる「効果のある学校論」というのは、ぼくが非常

に面白いなと思っているところでもあります。

つまり、「効果のある学校」というのは、やり方しだいで学校も学力低下は避けられるんだというところで、公立の学校の中にいくつか教育のやり方を工夫、改善することによって、教育効果を上げている学校があるんだというところを指摘されております。

先程来申し上げてる京都のその公立学校がそうであるように、問題は何かというと、教育にかかわる者の、つまり教師たちのレディネスの問題と、もう一つは経験の問題だろうというふうに思うんですね。つまり、いい学校の先生方というのは、子供たちを教えるという、あるいはものを教える以外の部分含めてなんですが、非常にレディネスが高い。教師集団としてのまとまりも強い。更にもう一つ申し上げるのは、経験が非常に豊富であるということなのかもしれません。その点からすれば、いくつかの学習塾の中に、そうしたいわゆるレディネス、あるいは経験というものを潤沢にお持ちの塾があれば、当然その教育効果はじゅうぶんに上げているわけです。

先程休憩時間に、何代にもわたって塾を経営されていらっしゃる方とお話をさせていただきました。もちろん子供たちも随分と代わる代わるその塾に、おじいちゃんの子供がやって来て、そのお父さんの子供がまたやって来てっていう塾があるって話です。それは、やはりそういった意味での、いわゆる「効果のある学校」と同じ発想の「効果のある塾」なのだろうと思っています。

ですから、ポイントはすべての子供たちに、その子供のニーズに合わせたというか、ニーズに応じたというか、そういった確かな学力を保証していくことができれば、公立学校は、必ずしも僕が先程申し上げたように不信感の塊ではないということでもあります。その効果を上げている学校も一部あることは事実です。ただ、その学校に入れるためには、どうしても校区という問題があって、それを越えなければならないという部分を私学がうまくカバーしているという辺りが実態だろうというふうに思っております。

苅谷 どうもありがとうございました。お待たせしましたという感じですが、これから今度はフロアの方と一緒に議論をしたいと思います。これまでのご発表に対する質問とかもあろうかと思えます。

始めるにあたって、一言これはお願いしたいんですが、この公開研究会では毎回記

録を、音声の記録を取りまして、そのあとテープ起こしをして機構のホームページで公開致します。登壇者の皆さんについては、そのあとでしゃべっていただいた内容についてチェックをしていただくことができるんですが、今日、フロアの皆さんがそれをやるということは、到底これはできませんので、その点をお含みいただいたうえで、「私の発言はカットしてほしい」ということはあらかじめ言ってください。

それから、いろいろ問題がある発言の場合には、こちらの権限で削除させていただくこともございますが、これはあくまでも公的なホームページを使つてのことですので、特に固有名詞なり、組織の名称などが出てきて特定の団体や個人に対する誹謗中傷的な内容が含まれた場合には、これは削除せざるを得ませんので、その点をご了解ください。

なお、ご発言の際にはご所属とお名前を一言言っていただいたうえで、ご発言を願いたいと思います。それではお待たせ致しましたが、これまでの議論含めてご質問やご意見などございましたら、どうぞお願い致します。

A A 総合研究会の A と申します。ほかに私学の先生たちと中身、教育、私学の中身の研究をしているグループをやっております。

それでちょっと今日お聞きしたいのは、何人かの先生たちが学校という所は「人間形成」と「人格形成」と、そういう言葉が使われてるわけですが、そこについて中身を、中身をちょっと知りたい。よろしくお願いします。

荻谷 はい。じゃ、何人かのご質問をまとめてあとでお答えいただくということで。ほかにご質問、ご意見ある方いらっしゃいますか。

なければ、まずここで佐藤先生と鹿毛先生にお答えいただいて、それからまたそれに対するコメントや質疑・・・。じゃ。

佐藤 学校ってのは、学力も保証しなければいけないし、人間形成のうえで学ばないといけないことあると思いますけれども、私は三つのこと考えているんですけども。

一つは、今子供たちを見たときに存在感がだんだんなくなっている。居場所がないという言葉をよく使われますけれども。学校の授業の中で孤立してる子供がいる。

佐藤 授業の中で孤立した子供をつくりたくない。今までどちらかというと、学校の中では自力解決と言って、「自分の力で何とかやんなさい」ということがけっこう多い。そうではなくって、一人で解決できないときには、仲間の支えによりながら伸びていくってことも考えられるわけですね。ですから、一つは存在感のない子供たちを存在感のある子供たちにしたいということ。

二つ目は他者性といって、集団の仲間とのかかわりの中で学力を高めていきたいという考え方も持っております。

それからもう一つは、意欲という点ですね。先程は私のお話の中でも塾へ通う子が全部がそうではありません。特にできる子供たちがそういう傾向があるわけですが、塾ですでに学んでるわけですので、学校で教科書通りやりますと意欲がない。いかにしてモチベーションを上げていくかっていうこともやっていかなきゃいけない。

苅谷 じゃ、鹿毛先生よろしいですか。

鹿毛 もうしゃべらなくてもいいと思ってたんですけども。簡単に申し上げますと、人間形成の場であるっていうことは、私は自明だと思ってたんですけども、もう少し踏み砕いて言うと、学校を教科を想定した学習以外の学習が起こってる場だと思っております。

例えば、友達とかかわる過程で何かに気付いたり、行事を通して自分に気付いたりとか、あるいはそういうようなことすべてもろもろのことですね。個性とか社会性とかっていうふうに簡単に言っちゃうと、分かったようで分かんなくなっちゃうので、われわれは体験を通して、教科を想定した知識であるとか、技能であるとか、あるいは態度。態度になりますと、かなり教科を想定しないところに近付いてきますけれども。そのようなことを日々学校という所で体験しつつ、その子が変わっていきます。つまり、その子が変わること自体が学びだと私は思ってますけども、その子が変わるきっかけとしては、それは教科以外でのいろんなことが起こってるわけで、それらも総体として人間形成というふうに呼びたいと思います。

苅谷 原先生にも、じゃあ、一言。

原 ほんとに一言なんです。僕は、学校の役割の中で非常に大きなものは、「社会化」

の機能だと思ってるんです。ソーシャライゼーションですね。子供が社会に出たときに、いかにその社会の中で自分というものを発揮できるか。この辺りのところを育てるのが、僕は学校だと思ってますし、塾でそれが決してできないと言っているわけでもありませんが、一番違うところは、そこではないかなというふうに思っております。

苺谷 よろしいですか、更に・・・。

A 個人的に言えば、私も教師をやって、進学教育もやって、不登校の子供の居場所も作ってということによって、さまざまな学校教育というか、教育という世界の幻想性みたいな、言葉の幻想性みたいなもの、ほとんどやられまして、先程の研究会で提案している課題は、人間形成という言葉が中身が全然分からないもんですから。

僕の中で今やっている作業ですね、「自分とは何か」、「なぜ学ぶのか」、「どう生きたらいいのか」という三つの課題を、テキストを作って、生徒たちと対話形式というか、生徒の中から出てくるものを拾い上げていくという作業をずっとやってきているんです。

人間形成という一般の言い方をされているということにちょっと違和感があったもんで、もう少し、現場ではそういうふうになってないんじゃないかなと僕の中で思ったもんですから、ちょっとお聞きしたい。

苺谷 ほかにいかがでしょうか。今と関連しても、関連してなくても結構ですが、ご意見とか、ご質問とかあれば。

O 東京大学教育学部のOと言います。これは倉井先生へのご質問になるんですけども、佐藤先生のレジュメにもあったんですけど、塾に行く理由として、ゆとり教育とか、学力低下、そういう話が拍車を掛けたと。

報告に学校だけでは学力が着かないみたいな話が載っているみたいなことをおっしゃられていたと思うんですけども、具体的に倉井先生のほうが、そういうふうにご数年塾に通い始めた生徒が、親が言うんですけども、具体的にゆとり教育がどうか、学力低下というのがちょっと心配でとか、そういう理由を何か口にするというのはあるのでしょうか。

もしくは、倉井先生のやってらっしゃる塾だけではなくて、ほかの塾の塾長さんだ

とか、先生方とか話をする中で、そういうふうにより教育だとか学力低下を理由にして、理由にしてというか、そういうのが理由の一つとして塾に通うご家庭のお子さんというのは来てらっしゃるのかどうかというのをちょっとお聞きしようかなと思って質問させていただきたいんですけども。

荻谷 はい。

倉井 学力低下が理由で塾へ入りたいという親御さんがいるかというお尋ねでいいですか。

その辺のところはないようですね。学力低下してるとか、そういうふうで入りたいとか。例えば、学校のほうの指導力が下がっているとか、そういうのはうちの場合はないです。全然お聞きしたことはありません。

荻谷 ほかの塾長さんも？

倉井 ほかの塾の方にもお聞きしますが、一番多いのはやっぱり高校入試です。高校入試を考えて皆さん入ってこられる。それはもう圧倒的多数がごぞいます。

荻谷 よろしいですか。じゃ、お次の方。

I 経済学部のIと申します。鹿毛先生のおっしゃったディープアプローチというような話に興味を持ったんですけど、特に大学のほうとか、生涯教育の面から見ると、ディープアプローチは大切になっていると思うんですが、サーフィスアプローチの弊害とディープアプローチの利点についてお話をもう少し詳しくいただきたいと思いません。

荻谷 じゃ、鹿毛先生、あまり長くならないように。これで90分使ってもお話し・・・。

鹿毛 多分私が語らなくて調べられると思いますので(笑い)。多分ちょっと今日のテーマとはずれますから遠慮しておきます。多分WEBなどで調べればディープアプローチ、サーフィスアプローチで検索できると思います。

荻谷 非常に興味のないいいワードですね、回答のコメント。(笑い) ほかにどうで

しょうか。

B 大変興味深いお話をありがとうございます。2点、私は伺いたいことがあります。塾という場合には、やっぱり義務教育と違って親がサービスを求めてお金を払う、それに対する対価としてやってもらう。子供の選択の自由よりは親が払うかどうかという問題がかなり大きいわけです。

実は私も2人の子供をそういう意味では塾には、やっている。進学塾も隠されたい塾というのを探していくとか、いろいろやったことがあるので。もう子供は大学生だからいいんですが。

親に対するサービスということで倉井先生と車先生には、親に対して塾としてどういうサービスを意識されているのか。私は塾に行くときすごく先生たちが副教材とか内容を語ってくれるのに、学校の保護者会に行くと、うちはこういう授業をやってますとか、学習をやってますなんてことはほとんどないです。その辺りを塾と、それから雅彰先生に保護者に対して学校が果たすべき機能としてどういうサービスというのをやって、意識しておられるか。

2点目が教材作りというお話がありましたが、やっぱり学校の教材と塾の教材、どこが違うと思って倉井先生はやっておられ、それから佐藤雅彰先生はどこを意識して塾じゃなくて学校だからやっている教材というのがあるのかというようなところを伺ってみたいというふうに思います。

それはだれにも、親に対するサービスが、アメリカでどうなっているのかというのがもし分かれば、簡単にで結構ですが伺えればと思います。

苅谷 じゃ、まず倉井先生。

倉井 入塾希望者というのは、うちの塾では一応子供さんと親御さん一緒に面接させていただいています。説明にかける時間は3時間から4時間かけます。指導法もすべて、それから生活習慣もあまりずれてる場合はその辺から直してくださいということから始めます。

あとはシステムも、うちはちょっとややこしくなっていて、ページ単位で管理しますので、例えば教材の何ページができないとか、その部分を毎月お知らせし

て、子供自身にも弱点はここだよと分かるようにしています。模試などで見られる「基本が出来ていません」とか「応用力をつけましょう」などという抽象的なアドバイスでは、子供本人が、どこの所が自分は弱いのかというのが分かりませんのでその辺は明確にしています。

それから、副教材を作ることについてなんですが、教科書会社さんが大体副教材、塾の副教材も作って、二つの経営を既になさっているような気がします。名古屋の場合は〇〇という会社がありまして、そこが窓口になって販売しています。

だから、塾の教材だと思ってありがたがっていると実際には違っていて、その会社が作った問題集に、例えばうちへ売り込みを掛けに来るときは、ここにあなたの塾名を入れて、値段もこれぐらいの幅で設定してくださいというふうになっているから、今、佐藤先生にお話ししたんですけど、塾自身もそこまでの教材を作る力というのはほとんどの塾には僕はないと思っています。

荻谷 佐藤先生。

佐藤 まとまって親に話をするというときには、大体四つぐらいのお話を口頭でしていきますけれども、小学校のときと中学校はちょっと違うんです。中学校の場合は、やっぱり親が学力を上げてほしいという気持ちがあるわけです。それに対してどうやって学校は学力を保証して、学力の向上ということを、話をします。

例えば、授業ではこういう学び方をしますよというお話は致します。そうしたときに、そういう学びをして結果はどうかという質問があります。ですから、中学1年生から学習カルテを作って、その子がどういう教材の単元のどういう内容ができるのか、できないのかとか。非常に細かくデータを採って親と話をすることにしております。それが2点目ですね。

三つ目は、親もできれば学習に参加してほしい。どういうことを先生が指導されているのかを見てほしい。どういうふうに先生方が学んでいるかも見てほしい。一緒にできれば子供を育ててもらいたい。ただし、そうはいつでも中学校の場合は子供が親の来ることを嫌います。まず、学校に来てほしいと言うと、子供が来るなというようなこと。その辺の闘いからまず始めるわけですがけれども、学級に1人でもいいですね、親が入るということ。地域の方が1人でも入るということが学校を開くことになるかなど。そういう開かれた学校を作りたいというようなことを、第3点目ですね。

第4点目は、毎年、年3回ですけれども、学校運営協議会というかたちで運営委員の構成メンバーは学校の職員、それから地域の方、保護者、それから子供ですね。それから、民生協議会とか保護司さんとか、そういう方も入りますけれども、そういう方が集まって、本当に校長が言っているような学校になっているのかどうかということ、を年に3回チェックをするということをやっています。

苧谷 じゃ、続いて車先生、お願いします。

佐藤 教材のほう・・・。

苧谷 教材のこと、そのことを一言。

佐藤 教材は、「あ、これは面白いな」って思うような、子供がこれを見たら吸い込まれていくようなというそういう教材ですね。大体、中学の数学教科書を見てみると、例題1、次の問を解きなさい。つまらないですよ。やっぱりその中に何かワンポイント入れてほしい。そういうためにはそういう教材も必要じゃないかな。社会科なんか本当に大変ですね。ざーっと覚えることが並んでおりますから。

苧谷 はい。じゃ、車先生、お願いします。

車 私たちの場合は、親御さんへのサービスとして成績を上げることが大事です。面談、相談の時間をなるべく多く持つようにしております。学校の先生より塾の先生と親御さんが気軽に話せるような雰囲気を持っているんじゃないかと思うんですけれども。そして、多くの情報を提供できるように努めています。

入試も日本でだけ入試するとか、韓国で受験を必ずしなければならないというようではなくて、いろんな選択肢があるということを情報提供として流しています。さまざまな情報としていろんなビジョンが持てることをしています。

成績を上げることが私たちにとってすごく大事な目標になっているんですけれども、学力が低いほうの子供の場合、そのような子供たちへの支援の仕方、テクニックとおっしゃったんですけれども、その場合に大事にしているのが時間をかけることと、易しく説明することに集中しています。私たちは塾なので親御さんの経済力の問

題もかなりかかわってきています。

教材に関しては、私の考えでは塾の教材より学校の教材がより優れていると思います。学校の教科書というのがより広く基本的な問題を扱っていると思っておりまし、塾の教材というのはやっぱり入試目的なので、学校の教材のほうが私には優れていると思います。

荻谷 じゃ・・・。

マクドナルド はい。アメリカの親から見ると、やっぱり学校はサービス業なのでうまくいかないんだったらつぶれてもそれは仕方がない。そういう態度がすべて資本主義ですね、まるで。だから、今の政策の中に公立学校は将来的にどうなるか、つぶれてしまうのか。私立が必ず増えるんじゃないですか。そういう恐れがありますので、いろいろと今、向こうで議論、討論していると思います。

荻谷 ほかにご質問とか。

S 教育学研究科の S と申します。教育費の費用負担という点についてお伺いしたいと思います。

荻谷 もうちょっと大きい声でお願いします。

S すみません。子供の学資予備調査などを見ますと、学校教育費に比べて、学校外教育費のうちの補助学習費とか、学習塾費というのがかなり高いと思うんですけども、学校で賄うべき部分と実際に家庭などで私的に賄っている部分と、そのバランスについて考えてみると面白いのではないかと思っています。

それで、先程佐藤先生が、補習塾が学校で賄えていない部分をそこに行ってくれると助かるみたいにおっしゃっていましたが、もしそういうふう子供を行かせる場合に、子供を通わせる費用についてはどういうふうにお考えになりますか。

あと、車先生に。韓国で私教育費の軽減策というのをやっていると思うんですが、塾や家庭教師の規制をやったというふう聞いていまして、その実態、規制の実態とか、変化がどういうふう反応したかということについて教えていただければと思います。

荻谷 佐藤先生。学習塾の負担。

佐藤 行けということではないんですよ。(笑い) 行ける人は行けばいいという考え方なんです。そこに塾があるんだから行ける人が行けばいい。そういう選択肢があったっていいのではないかというだけなんです。

そうすると、行けない子供が出てくるじゃないか、どうするかということになりますね。だからこそ本来は学校でやるべきことではないかな。だけれども、それが今の状況の中では賄えきれない部分がありますという、何か逃げのような言い方なんですけれどもそういったこと。

実際の学校で教育費（諸経費）は、1万円徴収でしたけれども、その中の大半は自分のものに使うんですよ。修学旅行へ行くお金だとか、食費です。給食をやっていたので給食費だとか。だからそれを引きますと本当に教材費というかたちなのは2千円ぐらいです。ほとんど自分のために使っています。

けれども、塾に行くときはもう万の単位ですよ。それは日によって、週に1回行くのか、2回行くのか、3回行くのかで違いますけれども、そうしますとやっぱり大変な親もいると思います。

倉井 ちょっと僕が答えてもいいですか。私の地域で、名古屋にあるある公立の中学校なんですけど、そこに入学すると1年の入学段階で試験を実施して学力を測り、その結果に基づいて指導します。どちらを選びますかという選択がちゃんとできるようになっていまして、学力にかかわらず部活をやるという選択肢もあります。それから、部活のために学力が下がっているようであれば部活のほうをちょっとストップして、そういう方たちは学校側で面倒見てくれるという選択もあります。また、部活をやらないという選択もあります。こういった良い中学も数としてはとても少ないですがあります。

荻谷 車先生。

車 私教育、塾とか、家庭教師への規制は今は緩和されています。税金がやや高くなっているだけです。是正的な低い子たちの補習塾の問題は、私たちの塾でも時間をかければ成績を上げることはできるんですけども、費用の問題があると申し上げた

んですが、私の提案としては、この学習への、補習の役割を学校でやってくれたほうがより理想的でないかとは考えています。

地域のボランティアでもいいですし、子供たちへの学習のサポートをできる体制を何かしら学校の中に取り入れることはどうかと考えています。

荻谷 ほかにご質問とかありますでしょうか。じゃ、あとお二人ということで、まず。

S 東京で学習塾を34年ぐらいからやってます、Sです。先程、原先生の話された中の公文教育研究会の「学習塾のメリット」という中で5項目ありまして、その中の一番最初の所に「一人ひとりの学力（学習力）が違って当たり前という考え方からスタートしている」というのが塾のメリットだというのがありまして、このことについて。

常々塾をやっている、子供たちと勉強しながら、学校に欠けている、学校になんないもの、あるいはこれに学校はどうやってこたえているのかな、これを無視しているのはちょっと傲慢じゃないかなとさえ思うことがあるので。あえて素朴な質問、疑問なんですけども、荻谷先生と時間の関係で原さんには最低、教育研究者の方に質問、答えていただきたいです。

最近学校では習熟度学習ってことで2クラス3展開とか、いろいろありますけども、脇から見ていると、塾から見ているとすごく中途半端なあいまいなやり方だなと、本音は隠されているなという気がします。

何が言いたいかといいますと、学校って一人一人の能力や学力が違うということをアカウントしてないのがすごく、最大の欠点というか、欠けているもので、これにどうやってこたえるのか。

例えば今年から公立中・高一貫、白鷗中学ですね。つい先日中学1年生が連立方程式を今やってるんです。中学1年生です。中国の子なんですね、そういう条件のもとだったからいとも簡単に。

あるいは英検も、昨日か落ちたって話を聞きましたけど、準1級、2級の人が入ってきて「ディス・イズ・ア・ペン」なんて本当に日本でかわいそうですよ。

そういう学習が中学や、だんだん学年が下がって、小学校の低学年でもかなりの差があるにもかかわらず、中学1年生、2年生、あるいは3年、高校1年と行われる実践。ちょっと待ってなさい、待ちなさいというかたちで我慢をさせて、まだ学校でする1年生で。あんなもん、例えば優秀な子は30分、あるいは20分でクリアできることですよ。それを3時間、5時間、あるいは半月もかけてやっている。その苦痛をどうやって教育研究者の方々はクリアしようとしているのか、学校教育の中で。

すごく現場でやっているとかわいそうだなと思うんですよ、子供たちが。これは教科によっても違います。特に数学・英語なんかだとクリアで、英検2級ぐらいの方が中1の基礎英語に本当に我慢させる。それでちょっとしゃべっていると怒られますからね。だからいい子っていうのは我慢できる子なんですよ。

その辺について、教育研究者の立場から、学校教育にどうやってそれを反映させようとしていくのか。これは塾だとある意味じゃ階級になってくると思うんですが、質問させてください。

荻谷 司会者の特権でまず原さんに振っておいて、考えようと思うんですけども。
(笑い)

原 それじゃ、僕がお答えしている間に解決策、考えてください。どう答えるのかというのは非常に難しい問題なんですけど、私が考えるに、例えば学校は今それを教科書のいわゆる発展学習で逃げようとしているというのがまず一つあると思うんです。

つまり、皆さんもよくご存じのように教科書を開きますと、ここまではみんな勉強しましょうという部分と、もう1ページ今度は発展学習のコーナーがありまして、ここからは余力のある子はやりましょうという構造になってまして、みんながやる所だけは共通して時間をそろえてやるんだけど、早く終わってしまった子はもう発展学習やってくださいというやり方で逃げてるんです。

これは結局、学習指導要領がこれまでの間に変わってきたことが非常に大きな問題であります。それまでの学習指導要領は、いわゆるここまでしか教えてはいけませんよという部分がずっとありました。

ところが、今の学習指導要領の基本的理念というのは、例えばナショナル・ミニマ

ムみたいなかたちになっていますから、いわゆる最低はここまでなんだ。だからここから先は、あとは自分、あるいは学校の裁量でやってくださいという考え方に指導要領そのものが変わってしまいました。

その辺りのところが今、先生のご指摘のような、学校の中に子供たちの重層構造を作ってしまった。それを何とか逃げようとするんだけど、教科書だけではとても追いつかない問題じゃないかなというふうに思います。

苺谷 ありがとうございます。今日のお話のまとめのところでちょっと言おうと思ったこととかかわるんですけども、今日お話を、登壇者の方のお話を伺っていて、やっぱり車先生がおっしゃったことの、韓国的な教育のとらえ方の非常にクリアカットな部分と、日本の教育の議論の対象性というんですか、際立っていたコントラストが今日はやっぱり出てると思うんです。

韓国の場合には、トップ1パーセントの子供たちのために公立の、これは国立ですよ、確か。

車 私立です。

苺谷 私立？

車 はい、私立です。

苺谷 特殊高校？

車 はい、そうです。会社から作られた。

苺谷 プライベート？科学高校というのは国立じゃないんですか。

車 国立です、それは。

苺谷 国立ですよ。

車 はい。国から金が・・・。

苧谷 つまり、トップ1パーセントの子供たちには1クラス15人で教師1人当たり5人の生徒でトップレベルの教育を行って・・・。

車 その学校は私立です。

苧谷 私立？ごめんなさい。じゃ、それは私立です。ただ、それと別にもうちょっとそれよりはあれだけど、科学技術高校みたいなエリート教育の部分がありますね。そういう国の政策としてそういう学校を作るということを求めるかどうかという問題だと思います。

今日のお話でもう一つ、このことから言うとすごく印象的な言葉は佐藤先生が最初におっしゃった、塾と学校の違いは1条項かどうかです。つまり1条項の中で今のトップエリート学校を日本が作るか、作らないか。この問題です。長い間日本は作らずに私学がそれをいわば結果的には担ってきたのが実情だと思います。

ただそこでは、私学の場合にはそこまでの、つまり国家政策としてそこまでやるかどうかというところまでは考えなくていいですから、何々大学に何人やるということで済んでいたのかもしれない。

ただ、私はこの問題、それは国として選択すべきかどうかという価値判断をしているのではなくて、そうしたことを、今、国家というフレームワークの中で考える時代なのか、もっと違うかたちで考える時代なのかというところで、恐らく公教育が揺れてるんだと思います。

もっと簡単に言えば、一つは司法の分権化という流れがあって、これはもう都道府県ごとに任せましょう。都道府県ごとにそういう学校を作りたかったら作ってもいいですよという権限が、地方がそういう権限を持った。

もっとそれを推し進めると、これは多分今日の塾の話とも関係しますが、もうバウチャーにしちゃって消費者が選ぶ。それでもって塾も何もかも全部それは最も緩やかな規定で言えば学校として認可しよう。そういうところの中でトップ1パーセントを目指す学校が出てきたら、それはバウチャーでやってください。これ、恐らく今、先進国で進んでいる一つの究極の姿はそっちのほうだと思うんです。その中で、いわば教育学全体が揺れ動いているわけです。

一方で、地方分権というのはそれとはまたちょっと違う軸で動いてますから、その三つどもえぐらいだと僕は思ってますが。ただそういう、これは教育研究者といても私は社会学の立場なので、現状分析という視点で言うと、そういういわば対立軸が揺れ動く中で、公教育というものをどう考えるかというのは最終的には国民の選択です。その選択をした結果、やっぱり1パーセントは必要だという決定になればそれはできるでしょうということしか言えません。

ちょっと司会者が逸脱してしまいました。もう1人ご質問の方が、そちら。

W 今お話を聞いてほとんど結構なんですけど、一つだけなんですけど、学力向上ということで。すみません、東京の中学校の教員のWと申します。

学力向上ということで、今、学力テストというようなことがありますけれども、例えば学校では、今、期末テストが終わって成績を付けようとか、そして今週から今度は面談が始まります。三者面談でというようなかたちでありますけれども、そこに区の学力調査の結果が来まして、区のほうはそれを、もちろん区としてはそれをやった、予算を使ってやったわけですから、区に説明責任ということでそれを分析して、そして今後の方針を各学校で出しますということを約束しまして、それを今やっているわけなんです。このあとは更に都の結果も参ります。これからです、間もなくですけども。

そのようなことで、学力をしっかりと向上させるということは大変な課題だとは思いますが、公立の中学校において、何が、どんな方法がいいかということにつきましては、これはもう本当に慎重に考えなきゃいけないと思うんですけども。学校は何も言い訳言っているわけじゃありませんで、私もよりいい方法があればいつでもそれを学ぼうと思っておりますし、教員と年じゅう悪戦苦闘しておりますけれども、今のようにどうやればいだろう、あれをやればいだろう。それからチェック機能がないんじゃないか、外部のチェック機能を高めようとか、そういう方法では決して真に向上していかないんじゃないか。

一つ、今、希望制なことが全国各地であると思うんですけども、義務教育でも希望で選べるというようなことが本区でもありまして、前年度の成績がたまたまうちの学校は良かったんです。そうしましたら、今の1年生は希望制でわっと来たんです。そして、たまたま私の友人の学校は近所なんですけれども、たまたまその学力テストがまずかったんです。100人以上が、この今子供が少ない中100人ぐらい学

区外に出て行ってしまったんです。

その結果、やったこの学力テストなんですけど、当然本校の場合は少し下がりましたし、そして人気のない学校のほうが、大変上がっているんですよ。

ということは、子供に自信がない親御さん、あるいは子供をどっかいい所に行けば楽しい学校があるんじゃないかな、そういう気持ちで恐らく選んだと思うんですけども、その結果、本校のほうは授業中各教科ノートも取れない、ノートを取るんだよと言ってもなかなかノートを取れない子が数人ずつおります。つまり、あの学校に行けば学力が向上するんだという何かあり得ない幻想で来てるんですよ。

今、行政、職員と色々な改革が進められておりますけれども、その改革が果たして継続的な、私たち学校運営をどの程度支援してくれるのかということは大変疑問でして、ぜひこういうことを、本当、真の意味でのチェック機能を高めていきたいなんていうふうに思いまして、学力だけか、良い学校だとかいうことがさっきから出ておりまして、大変気になりまして、これだけ申し上げようと。

それから塾としましては、例えば高校でこういうことがありました。都立高校で詳しい進路説明があります。大変な、分析した国立でどうのこうのという、そういう大変専門的な進路説明会を塾の方が来てやってくれました。そして高校の先生はいわゆる司会に回ってあったんですけども、私は大変これは有効なことだなど思いました。その間高校の先生は良い授業のためにどんどん勉強してほしいと思いましたが、塾の方の素晴らしい分析力に感心致しました。

また、中学校なんかですと部活、文武両道のびのびやって、そして最後は完璧に、塾へ行って頑張ろうとって塾を選ぶ。あるいは1、2年生でうろうろしちゃってもう全く授業にも出られなかった子が、3年になって「先生、僕高校へ行きたいよ」と言ったときに、本当に塾にお世話になって行ける状態等、オプションといいますか、一人一人の、個に応じた学びの場を提供してくれていることに大変ありがたく思っております。何か、すみません。

荻谷 ご質問というよりはコメントということで承ってよろしいでしょうか。

長時間にわたりましてありがとうございました。本当は最後に一言ずつ登壇者の方にと申したんですが、これで1人3分ずつしゃべられたら、またこれはとてつもない

時間がかかってしまうし、3分で終わるのかなとも思いますので、今日はちょっとこの辺で終わらせていただこうと思います。

また、お時間のある方で登壇者の方と個別にお話ししたい方は、登壇者の方の時間の許す範囲で、これは個別のケースにお任せしますので、また****いただければと思います。

今回2回目ということで、こういう塾と学校の視点からの公開研究会を当機構では行って参りました。途中で予告しましたように、この結果はテープ起こしをしましてチェックをしたうえでいずれ機構のホームページ上で公開させていただきます。

また、そのことを通じまして今後も継続して、要するにこれは塾が良くなる、学校が良くなるという話ではなくて、要するに、日本の教育が良くなるかどうかということが一番大事な問題ですので、そういう意味では互いにそこで学び合いながら塾と学校というものが、今後日本の教育を支えていくのか。

また、あるいはそのことを通じて日本の教育研究をいろいろなクリアな問題点というのも、こうして学校を見ている以上にやっぱり出てきていると思いますので、そういった点を今後もわれわれのセンターのほうでは研究活動として続けていきたいと思っております。

本当に今日は長時間にわたりましてありがとうございました。(拍手) これにて今回は閉じさせていただきます。

(終了)